

福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告18

畑中遺跡
蓬来内館跡

2006年

福島県教育委員会
財団法人福島県文化振興事業団
福島県土木部

福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告18

畑中遺跡
蓬来内館跡

序 文

文化財は、それぞれの地域の歴史に根ざした文化遺産であると同時に、我が国の歴史や文化等の正しい理解と、将来の文化の向上発展の基礎をなすものであり、そのままの形で保存し、後世に伝えていくことが大切です。

さて、「福島空港・あぶくま南道路」は、東北自動車道矢吹インターチェンジから福島空港を経て磐越自動車道小野インターチェンジとを結ぶ自動車専用道路です。矢吹インターチェンジから福島空港インターチェンジ間が平成14年度までに、平田インターチェンジから小野インターチェンジ間が平成16年11月にそれぞれ2車線で供用が開始され、現在は、福島空港インターチェンジから平田インターチェンジ間の建設工事が進められています。

この計画路線上にも、先人が残した貴重な文化遺産が埋蔵されており、福島県教育委員会は、周知の埋蔵文化財包蔵地を含め、数多くの遺跡等を確認し、保存のための協議を重ねております。しかし、現状での保存が困難なものについては、記録として保存するために発掘調査を実施しております。

本報告書は、平成17年度に発掘調査された、近世の塚跡や焼成土坑等が確認された石川郡玉川村の畑中遺跡、中世の城館跡である石川郡平田村の蓬来内館跡の調査結果をまとめたものです。

今後、この報告書が、県民の皆様の文化財に対する理解を深めるとともに、地域の歴史を解明するための基礎資料として、さらには生涯学習等の資料として広く活用していただければ幸いに存じます。

最後に、発掘調査の実施にあたり、御協力いただいた玉川村、平田村の両教育委員会、福島県土木部、財団法人福島県文化振興事業団をはじめとする関係機関及び関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成18年9月

福島県教育委員会

教育長 富田 孝 志

あ い さ つ

財団法人福島県文化振興事業団では、福島県教育委員会から委託を受け、県内の大規模な開発に先立ち埋蔵文化財の調査を行っております。福島空港・あぶくま南道路に関連する埋蔵文化財の調査は、平成9年度から開始し、平成17年度には玉川村に所在する畑中遺跡と平田村に所在する蓬来内館跡の発掘調査を実施いたしました。本報告書は、これら2遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。

畑中遺跡では、近世のものと思われる塚や溝跡などが調査されました。塚は民間信仰との関わりの中で築かれたものとみられます。また木炭を生産したとみられる土坑も確認されています。蓬来内館跡は、中世の城館跡と考えられます。尾根の頂部に、空堀や土塁を伴う平場が確認されました。平田村内には蓬田氏が在城した蓬田館跡を始めとして多くの中世城館があることから、これらとの関係が注目されます。

今後、これらの調査成果を歴史研究の基礎資料として、地域において広く活用していただければ、幸いに存じます。

終わりに、発掘調査から報告書刊行に至るまで、御指導・御協力いただきました関係諸機関ならびに関係各位に深く感謝の意を表します。

平成18年9月

財団法人 福島県文化振興事業団
理事長 高 城 俊 春

緒 言

1. 本書は、平成17年度に実施した福島空港・あぶくま南道路関連の遺跡発掘調査報告書である。
2. 本書には、平成17年度に実施した福島空港・あぶくま南道路関連遺跡調査のうち、福島県石川郡玉川村に所在する畑中遺跡、石川郡平田村に所在する蓬来内館跡の調査成果を収録した。
3. 本事業は、福島県教育委員会が福島県土木部の協力を得て、発掘調査を財団法人福島県文化振興事業団に委託して実施したものである。
4. 財団法人福島県文化振興事業団遺跡調査部では、次の職員を配置し調査を実施した。
文化財主査 宮田安志
なお、臨時的に次の職員の参加・協力を得た。
文化財主査 山岸英夫 文化財主査 国井秀紀 文化財主査 今野 徹
文化財副主査 福田秀生 文化財副主査 山元 出
5. 本書は、調査を担当した職員が分担して執筆し、各原稿の文末に文責を明記した。
6. 本書に掲載した自然科学分析は次の機関に依頼し、その結果を付編に掲載した。
放射性炭素年代測定 株式会社加速器分析研究所
7. 本書に掲載した地図は、国土交通省国土地理院長の承認を得て、同院発行の1/25,000地形図を複製使用したものである。(承認番号 平18東復第87号)
8. 本書に収録した遺跡の調査記録および出土資料は、福島県教育委員会が保管している。
9. 発掘調査から本書の作成にいたるまで、次の機関から助言・協力を得た。
あぶくま高原自動車道建設事務所 玉川村教育委員会 平田村教育委員会

用 例

1. 本書の遺構実測図用例は、次の通りである。

- (1) 方 位 図中の方位は真北を示す。方位の無いものは、すべて図の真上を真北とする。
- (2) 縮 尺 1/30～1/250で採録し、スケール右脇に縮尺率を示した。
- (3) ケ バ 遺構内の傾斜部は「」の記号で表現し、相対的に緩傾斜の部分には「」の記号で表現し、後世の掘乱部や人為的な削土部は「」の記号で表現した。
- (4) 土 層 遺構外堆積土はローマ数字で、遺構内堆積土は算用数字で示した。
(例) 遺構外堆積土…L I・II 遺構内堆積土… \varnothing 1・2
土色については、『新版 標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所 1994）に基づいて判断した。
- (5) 線 種 実線で上・下端・調査区境、短い破線で推定線や特定の土層範囲を示す。
- (6) レ ベ ル 断面図中の数値は標高を示す。
- (7) 網 点 遺構図で使用した網点の用例は各挿図に示した。

2. 本書における遺物実測図等の用例は、次の通りである。

- (1) 縮 尺 スケールの右脇に縮尺率を示した。
- (2) 遺物番号 遺物は挿図ごとに通し番号を付し、写真図版の中にも編ごとの挿図番号を付し、挿図の遺物番号と一致するようにした。例えば、図1の2番の遺物を、文章中では「図1-2」と表記、写真図版中では「1-2」と表示した。

3. 引用・参考文献は執筆者の敬称を省略し、編ごとにまとめて掲載した。

4. 本書で使用した略号は、次の通りである。

玉川村-TG	平田村-HT	畑中遺跡-HTN	蓬来内館跡-HUT
遺構外堆積土-L	遺構内堆積土- \varnothing	土坑-SK	溝跡-SD
性格不明遺構-SX	ビット-P	グリッド-G	

目 次

序 章

第1節 調査の経緯	1
第2節 地理的環境	5

第1編 畑中遺跡

第1章 遺跡の環境と調査経過	9
第1節 位置と地形	9
第2節 調査経過	10
第3節 調査方法	11
第4節 歴史的環境	12
第2章 遺構と遺物	15
第1節 基本土層	15
第2節 塚	15
1号塚 (15)	
第3節 土 坑	18
1号土坑 (18) 2号土坑 (18)	
第4節 性格不明遺構	19
1号性格不明遺構 (19)	
第5節 溝 跡	20
1号溝跡 (20) 2号溝跡 (22) 3号溝跡 (22)	
第6節 遺構外出土遺物	23
第3章 ま と め	24

第2編 蓬来内館跡

第1章 遺跡の環境と調査経過	27
----------------------	----

第1節	位置と地形	27
第2節	調査経過	28
第3節	調査方法	29
第4節	歴史的環境	30
第2章	遺構	33
第1節	遺跡の概要と基本土層	33
	基本土層 (33) 1号平場 (34) 2号平場 (34)	
第2節	堀跡と土塁	37
	1号堀跡 (37) 1号土塁 (40)	
第3節	その他の遺構	40
	1号土坑 (40) 2号土坑 (41) 3号土坑 (42)	
	4号土坑 (42) ビット (42)	
第3章	まとめ	44
付 編		
	福島県玉川村畑中遺跡、平田村蓬来内館跡出土炭化物の放射性炭素年代測定結果	47

挿 図 ・ 表 目 次

序 章

[挿 図]

図1 福島空港・あぶくま南道路位置図	1
--------------------------	---

[表]

表1 福島空港・あぶくま南道路関連発掘調査遺跡一覧	4
---------------------------------	---

第1編 畑中遺跡

[挿 図]

図1 畑中遺跡調査区位置図	9	図5 1・2号土坑、1号性格不明遺構	20
図2 畑中遺跡周辺の遺跡	13	図6 1～3号溝跡	21
図3 遺構配置図と基本土層	16	図7 1号塚・遺構外出土遺物	23
図4 1号塚	17		

[表]

表1 関連する周辺の遺跡	14
--------------------	----

第2編 蓬米内館跡

[挿 図]

図1 蓬米内館跡調査区位置図	27	図5 1・2号平場	38
図2 蓬米内館跡周辺の遺跡	31	図6 1号堀跡・1号土塁・P1～4土層	39
図3 蓬米内館跡調査区全体図・エレベーション	35	図7 1～4号土坑	41
図4 基本土層、1・2号平場土層	36	図8 グリッドピット	43

[表]

表1 関連する周辺の遺跡	32	表2 ピット一覧	43
--------------------	----	----------------	----

付 編

[表]

表1 畑中遺跡・蓬米内館跡出土炭化物の放射性炭素年代測定結果	49	表2 参考値：暦年補正	50
--------------------------------------	----	-------------------	----

写真目次

第1編 畑中遺跡

1 遺跡全景	53	5 塚・土坑・性格不明遺構	55
2 基本土層	53	6 1・2号溝跡	56
3 1号塚全景	54	7 1号塚・遺構外出土遺物	56
4 1号塚土層	54		

第2編 蓬来内館跡

1 遺跡現況	57	8 1号平場細部	60
2 遺跡現況	57	9 2号平場	61
3 遺跡全景	58	11 2号平場細部	61
4 遺跡全景	58	11 1号堀跡全景	62
5 遺跡全景	59	12 1号堀跡・1号土塁土層	62
6 1・2号平場全景	59	13 1号堀跡細部	63
7 1号平場	60	14 1号堀跡・土坑	64

序 章

第1節 調査の経緯

1 福島空港・あぶくま南道路建設計画事業の概要

福島県が整備を進めている地域高規格道路「福島空港・あぶくま南道路」（愛称：あぶくま高原道路）は、東北自動車道矢吹インターチェンジ（以下ICとする）から福島空港を経て、磐越自動車道小野ICに至る自動車専用道路である。

本事業は、福島県が福島空港を中核として高速交通網を整備する必要性から、主要地方道矢吹・小野線の地方道改築事業として位置づけられ、路線総延長34.8km、設計速度80km、車線数4車線で計画された。平成6年8月に東北自動車道矢吹IC～福島空港間と磐越自動車道小野IC～国道49号間が優先区間として路線発表された。本路線は、国土交通省が重点的に整備を進めている地域高規格道路の計画路線に、平成6年から計画全体が組み込まれ、平成10年度までに玉川村吉地区～平田村上蓬田地区区間を除いて整備区間に、平成13年度には玉川村吉地区が整備区間として新たに組み込まれることとなった。

福島県土木部では、道路建設の本格化に伴い、平成7年度に平田村に「あぶくま高原自動車道建設事務所」を開所し、平成8年度から当面暫定2車線での供用を目指して本線工事に着工した。平成13年3月27日には、矢吹IC～玉川IC間の10.5kmが開通し、同年、須賀川市を会場として開催された「うつくしま未来博」へのアクセスに貢献した。続いて、平成14年9月18日には玉川IC～福島空港IC間が、平成16年11月25日には磐越自動車道小野IC～平田IC間が相次いで開通し、現在残る区間の福島空港IC～平田IC間13.7kmについて建設が進められている。

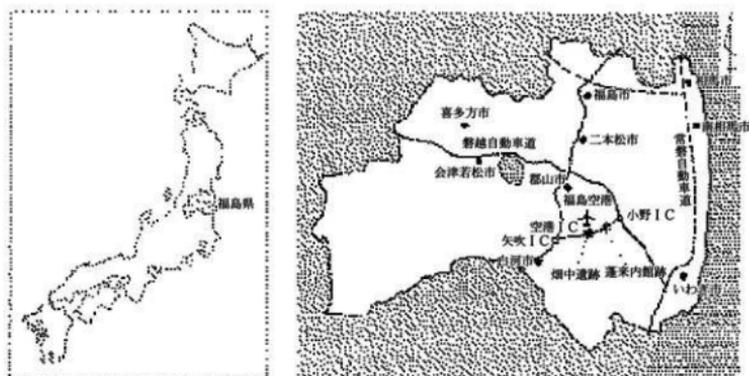


図1 福島空港・あぶくま南道路位置図

2 平成16年度までの調査経過

本路線建設工区内の埋蔵文化財の調査は、所在確認のための表面調査も含め平成8年度より実施されている。平成8年度は、矢吹町及び小野町の分布調査を両町教育委員会が主体となって進め、表面調査の結果、矢吹町7遺跡・小野町8遺跡と遺跡推定地1箇所（矢吹町）を確認・発見した。この内、工事着工優先箇所にかかる11遺跡（矢吹町7遺跡・小野町4遺跡）について、試掘調査が実施された（矢吹町教育委員会1999）。

平成9年度からは、福島県教育委員会が財団法人福島県文化センター（平成13年度より財団法人福島県文化振興事業団に名称変更）に調査業務を委託し、埋蔵文化財の調査を一貫して行った。

平成9年度は、矢吹町内の8遺跡（上宮崎A・上宮崎B・小又・下宮崎A・白山A・白山C・白山D・白山E遺跡）、小野町内の2遺跡（柳作B・北ノ内遺跡）の発掘調査を実施した。あわせて矢吹町内及び小野町内の11遺跡、遺跡推定地1箇所の試掘調査を行った（『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告1～3』・『福島空港・あぶくま南道路遺跡分布調査報告1』）。また、本路線中具体的に路線発表されていた東北自動車道矢吹IC～福島空港間と磐越自動車道小野IC～平田ICにおける表面調査を実施し、周知の遺跡を含む37遺跡と遺跡推定地22箇所を発見・確認した（『福島県内遺跡分布調査報告4』）。

平成10年度は、矢吹町内の10遺跡（田町・八幡町A・八幡町B・文京町・弥栄A・白山D・白山E・後原・弘法山遺跡、弘法山古墳群）、玉川村内の1遺跡（金波B遺跡）、小野町内の3遺跡（柳作A・柳作B・柳作C遺跡）の発掘調査と矢吹町内・玉川村内・小野町内の12遺跡、遺跡推定地8箇所の試掘調査を実施した。この年度より、調査は玉川村に所在する遺跡にも進展している（『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告4～10』・『福島空港・あぶくま南道路遺跡分布調査報告2』・『福島県内遺跡分布調査報告5』）。

平成11年度は、矢吹町内の3遺跡（赤沢A・赤沢B・後原遺跡）、玉川村内の3遺跡（高原・江平・金波B遺跡）の発掘調査と矢吹町内・玉川村内の9遺跡、遺跡推定地4箇所の試掘調査を実施した。あわせて玉川村吉・南須釜地区の表面調査を実施し、周知の遺跡を含む7遺跡と遺跡推定地8箇所を発見・確認した（『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告9～11』・『福島県内遺跡分布調査報告6』）。

平成12年度は、玉川村内の6遺跡（江平・堂平A・堂平D・堂平E・堂平F・栗木内遺跡）の発掘調査と矢吹町内・玉川村内・小野町内の7遺跡、遺跡推定地5箇所の試掘調査を実施した。県道古殿須賀川線から国道49号までの区間の表面調査では、周知の遺跡を含む14遺跡と遺跡推定地25箇所を発見・確認した（『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告12・13』・『福島県内遺跡分布調査報告7』）。なお、平成12年度の試掘調査をもって、矢吹町内の調査を全て終了した。

平成13年度は、玉川村内の6遺跡（栗木内・宮ノ前A・中下・堂平G・池ノ上・兎田遺跡）と小野町内の3遺跡（反田B・関場B・鹿島遺跡）の発掘調査を実施した（『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告14～16』）。また発掘調査に先立ち、福島県教育委員会は、6～7月に小野町葛

蒲谷及び雁股田地区及び平田村上蓬田・蓬田新田地区の試掘調査を実施した。この結果、反田B遺跡・関場B遺跡・仁井殿遺跡・中根館跡について要保存範囲が確定された（『福島県内遺跡分布調査報告8』）。

平成14年度は、小野町に所在する仁井殿遺跡と、平田村の中根館跡の発掘調査を実施した。仁井殿遺跡の調査は4月から5月末にかけて行われ、縄文時代早期末葉の竪穴住居跡や落し穴が確認されている。中根館跡の調査は5月から11月にかけて実施され、戊辰戦争の際に築かれた可能性のある防塁などが確認された。また、平田村の中根館跡・後曲遺跡・曲山C遺跡について、条件整備等の関係で持ち越しとなった未試掘部分を対象に第2次試掘調査が行われたが、要保存範囲の追加はなかった。平成14年度をもって、福島空港・あぶくま南道路小野IC～平田IC間の建設予定地内における調査は全て終了となった。

平成15年度には、発掘調査・試掘調査とも行われず、福島空港IC～平田ICにかけての表面調査が実施された。また、前年度に調査した仁井殿遺跡及び中根館跡の発掘調査報告を行った（『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告17』）。

平成16年度には、表面調査及び玉川村吉地区に所在する3遺跡（畑中・中下B・宮ノ前B遺跡）の試掘調査が行われ、畑中遺跡・中下B遺跡について工区内における要保存範囲が確定した。

3 平成17年度の調査経過

平成17年度当初から、未開通の福島空港IC～平田IC間に係る遺跡の調査について調整が図られた。平成17年5月16日、あぶくま高原自動車道建設事務所、福島県教育委員会、財団法人福島県文化振興事業団の間で協議がもたれ、工事優先箇所に係る未試掘箇所の確認等が行われた。これに基づき、9月21日から9月30日にかけて、玉川村所在の石橋遺跡と推定地1箇所、石川町の法昌段B遺跡、平田村所在の蓬来内館跡・空釜B遺跡の試掘調査が実施された。この結果と昨年度の試掘結果を受け、工事最優先箇所である畑中遺跡と蓬来内館跡について、発掘調査を実施することとなった。

財団法人福島県文化振興事業団では、平成17年4月1日付の福島県教育委員会との委託契約に基づき、調査員1名と他事業担当調査員2名を配し、まず畑中遺跡の発掘調査に着手した。畑中遺跡は、丘陵頂部に位置する畑中塚の存在が知られていた。この塚と、平成16年の試掘調査で確認された木炭焼成土坑1基を含む丘陵上の1,000㎡が調査の対象となった。

9月13日、調査区の草刈りや調査連絡所・仮設トイレの設置等から着手し、9月27日からは重機による表土除去作業を実施した。続く遺構検出作業の結果、土坑や近世以降の所産とみられる溝跡等が検出された。10月からは検出した遺構について精査を進め、10月20日までに全ての遺構の記録を終了した。10月21日には器材の撤収等を含め、現地での調査を終了した。11月8日、福島県教育委員会、あぶくま高原自動車道建設事務所、財団法人福島県文化振興事業団の各担当者が現地に集まり、排土等が適正に処理されていることなどを確認して、引き渡しを行った。

蓬来内館跡については、要保存範囲とされた工区内の1,500㎡について、10月19日より調査に着

表1 福島空港・あぶくま南道路関連発掘調査遺跡一覧

町村名	地区名	遺跡名	調査面積(m ²)	調査期間	主要時代	種別
矢吹町	上宮崎	上宮崎A	9,800	平成9年4月21日～9月18日	奈良・平安	集落跡
矢吹町	上宮崎	上宮崎B	9,600	平成9年5月6日～10月17日	古墳	古墳群・集落跡
矢吹町	上宮崎	小又	9,400	平成9年5月12日～12月12日	縄文・奈良・平安	狩猟地・集落跡
矢吹町	下宮崎	下宮崎A	3,200	平成9年4月30日～9月12日	奈良・平安	集落跡
矢吹町	白山	白山A	8,400	平成9年5月6日～10月9日	縄文・古墳	集落跡
矢吹町	白山	白山C	13,000	平成9年6月9日～12月25日	縄文・古墳・奈良・平安	集落跡
矢吹町	白山	白山D	2,020	平成9年10月20日～12月18日	古墳・平安	集落跡・水田跡
矢吹町	白山	白山E	1,500	平成9年6月16日～8月6日	平安	集落跡・泉跡
小野町	菖蒲谷	柳作B	100	平成9年8月25日～8月29日	近世	塚
小野町	北ノ内	北ノ内	1,800	平成9年10月20日～12月5日	平安・近世	集落跡
矢吹町	田町	田町	2,500	平成10年4月21日～6月23日	縄文	集落跡
矢吹町	弥栄	弥栄A	900	平成10年7月2日～9月3日	弥生	集落跡
矢吹町	八幡町	八幡町B	2,200	平成10年8月3日～10月30日	弥生	集落跡
矢吹町	八幡町	八幡町A	2,100	平成10年6月18日～7月31日	縄文	狩猟地
矢吹町	文京町	文京町	1,100	平成10年4月20日～6月17日	弥生	集落跡
矢吹町	白山	白山D	5,080	平成10年4月21日～8月25日	古墳・平安	集落跡・水田跡
矢吹町	白山	白山E	1,500	平成10年5月6日～7月14日	平安	集落跡
矢吹町	奉行塚	弘法山	300	平成10年10月7日～10月15日	不詳	塚群
矢吹町	奉行塚	弘法山古墳群	10,000相当	平成10年8月21日～12月25日	古墳	横穴墓群
矢吹町	谷中	後原	5,600	平成10年5月26日～11月6日	縄文・奈良・平安	集落跡
矢吹町	谷中	後原	1,200	平成10年11月26日～12月18日	縄文・奈良・平安	集落跡
玉川村	川辺	金波B	1,400	平成10年11月9日～12月11日	奈良・平安	集落跡
小野町	菖蒲谷	柳作A	1,520	平成10年5月11日～8月31日	奈良・平安	集落跡
小野町	菖蒲谷	柳作B	1,200	平成10年4月20日～7月17日	縄文	集落跡
小野町	菖蒲谷	柳作C	1,500	平成10年4月20日～7月27日	奈良・平安	集落跡
矢吹町	谷中	後原	1,200	平成11年10月7日～12月10日	縄文・奈良・平安・中世	集落跡
矢吹町	赤沢	赤沢A	2,900	平成11年7月6日～10月7日	縄文・平安	集落跡・狩猟地
矢吹町	赤沢	赤沢B	17,500	平成11年4月21日～9月22日	縄文・平安	集落跡・狩猟地
玉川村	小高	高原	2,800	平成11年5月6日～9月7日	古墳～平安	集落跡
玉川村	小高	江平	36,000	平成11年5月31日～12年3月17日	旧石器～中世	集落跡・古墳群・館
玉川村	川辺	金波B	800	平成11年4月19日～5月21日	奈良・平安	集落跡
玉川村	小高	江平	18,800	平成12年4月10日～10月27日	旧石器～中世	集落跡・古墳群
玉川村	藤生	栗木内	3,100	平成12年10月13日～12月22日	縄文・平安	集落跡
玉川村	川辺	堂平A	2,700	平成12年8月3日～10月13日	縄文・平安	散布地
玉川村	川辺	堂平D	3,000	平成12年6月19日～8月30日	縄文・平安	集落跡
玉川村	川辺	堂平E	1,900	平成12年6月19日～8月10日	弥生	集落跡
玉川村	川辺	堂平F	500	平成12年6月19日～10月4日	平安	集落跡
玉川村	藤生	栗木内	6,400	平成13年4月10日～9月18日	縄文・古墳・平安	集落跡
玉川村	川辺	堂平G	3,100	平成13年4月9日～6月29日	縄文・奈良・平安	集落跡
玉川村	吉	宮ノ前A	5,300	平成13年4月9日～9月14日	縄文・平安・近世	集落跡
玉川村	吉	中下	3,100	平成13年4月9日～7月13日	平安	集落跡
玉川村	吉	池ノ上	1,200	平成13年7月2日～9月14日	縄文・弥生・平安	散布地
玉川村	南須釜	鬼田	2,500	平成13年7月2日～9月13日	縄文・弥生・近世	集落跡・墓地
小野町	菖蒲谷	鹿島	3,300	平成13年9月5日～11月30日	縄文・平安	集落跡
小野町	菖蒲谷	反田B	1,300	平成13年9月19日～11月20日	縄文	集落跡
小野町	雁股田	岡場B	1,200	平成13年10月1日～11月9日	縄文・平安・近世	散布地
小野町	雁股田	仁井殿	3,000	平成14年4月9日～5月31日	縄文・平安	集落跡
平田村	上蓬田	中根船跡	21,100	平成14年5月7日～11月8日	縄文・平安・近世	狩猟地・城船跡
平田村	吉	畑中	1,000	平成17年9月13日～10月21日	縄文・弥生・近世	塚・散布地
平田村	下蓬田	蓬来内館跡	1,500	平成17年10月19日～12月9日	中世	城船跡

手した。まず重機による伐採木の処理や表土剥ぎ、駐車場用地の造成等を実施し、11月初旬からは本格的な遺構検出作業を開始した。11月中旬からは検出した遺構について順次精査を行い、その結果、平場と土塁・堀跡が一体となって機能していた城館としての体裁が次第に明らかになった。12月上旬までに遺構の記録等を概ね終了し、12月9日に調査連絡所の撤去等を含めて調査を終了した。12月15日、各担当者により、現地において調査成果や調査区及び排土の状況等が確認され、引き渡しを行った。

第2節 地理的環境

福島県は東北地方の南端に位置し、全国で3番目に面積の広い県土を有している。県内を分割するように越後山脈、奥羽山脈及び阿武隈高地が南北に連なり、西から会津地方・中通り地方・浜通り地方という気候・風土を異にする3地方が形成されている。

今回調査対象となった畑中遺跡が所在する石川郡玉川村及び蓬来内館跡が所在する石川郡平田村は、ともに中通り地方の南部に位置する。中通り地方は、奥羽山脈と阿武隈高地に挟まれた区域である。栃木県と福島県の県境にある那須連山に水源をもつ阿武隈川が中通り地方の中央部を南から北へ流れ、その周囲に河岸段丘や盆地などの低地が形成されている。また阿武隈川の東岸に沿うように、阿武隈高地が茨城県北部から福島県東部を経て、宮城県南部に至っている。阿武隈高地は標高500～800mの隆起準平原で、畑中遺跡の所在する玉川村はその西縁に、蓬来内館跡のある平田村はそのほぼ中央に各々立地している。

阿武隈高地は、花崗岩類を主体として構成され、ほとんどが中生代白亜紀に形成されたと考えられている。阿武隈高地は地質学的に北部と南部に区分され、北部では花崗岩や花崗閃緑岩が分布し、南部では花崗岩類の所々に変成岩が分布している。玉川・平田両村の地質をみると、玉川村の中央部および平田村の大部分には古期花崗岩が広く分布している。また玉川村の東部から平田村との村境にかけては、新期花崗岩が古期花崗岩に貫入して分布している。畑中遺跡及び蓬来内館跡の基盤層は、このうちの古期花崗岩にあたる。花崗岩を構成している石英は、被熱すると急激に膨張するため、花崗岩は熱に弱い。また膨脹・収縮を繰り返すと、鉱物間の結びつきが弱くなって破碎する性質も持っている。このような性質をもつ両遺跡の基盤をなす古期花崗岩は、長期にわたる浸食・風化のため、表層部は真砂化している。丘陵上の堆積土も基盤の花崗岩類が風化して軟らかくなったもので、黒色土の堆積はおしなべて薄い。

玉川・平田両村が立地する阿武隈高地は、海洋性気候の浜通り地方と異なり、寒暖差の激しい内陸性気候である。浜通りに比べると気温の年変化・日変化ともに大きい。夏季、真夏日になることは少ないが、連日夏日が続く。冬期の冷え込みも厳しく、特に標高が高い平田村では、2月の月平均気温は0.1℃である。ただし日本海からの湿った空気が、越後山脈、奥羽山脈に雪を降らせた後に到達するため、積雪は比較的少ない。

玉川村は阿武隈高地の西縁にあたり、村の西端を阿武隈川が流れている。東は平田村、西は西白河郡矢吹町と岩瀬郡鏡石町、北は須賀川市、南は石川郡石川町と隣接している。玉川村の面積は46.62km²である。北東部の四辻新田付近が標高500mを超えて最も高く、そこから南西に向かって緩やかに高度を減じている。阿武隈川沿いには数段の河岸段丘が発達し、自然堤防や後背低地をみる事ができる。また阿武隈川に注ぎ込むいくつかの小河川周囲には低地があり、畑中遺跡周辺は、このような低地と阿武隈高地の樹枝状に入り組んだ丘陵部からなる。畑中遺跡周辺の樹枝状の丘陵は、基盤が侵食作用を受けて形成されたものである。畑中遺跡では南西から北東に延び、阿武隈川支流の金波川が形成した低地に繋がっている。

玉川村に原生林はみられず、ほとんど全てが人手の加えられた山林である。スギやヒノキなどの人工林と落葉広葉樹を主体とする雑木林、または自生のアカマツによる天然造林などである。スギは第2次世界大戦後に盛んに植林され、現在かなりの面積を占めている。谷底部は水田として利用されている。谷底部の堆積物は丘陵部が侵食されて土砂等が流入して堆積したもので、谷頭に各所で湧水が観察される。水稲耕作の際には、こうした谷頭からの湧水が利用され、所々に溜池が分布している。また丘陵部の斜面下位の平坦地や緩斜面は畑作に利用されている。なかには、かつて養蚕が盛んな折に桑畑として利用し、現在は荒地になっている平坦地も各所に認められる。

蓬来内館跡が所在する平田村は、西は玉川村と須賀川市、北は郡山市と田村郡小野町、東はいわき市、南は石川郡石川町と古殿町などと村境を接している。平田村の面積は913.77km²である。村の北西には当地域の主峰である標高952.2mの蓬田岳が聳える。蓬田岳に水源をもつ北須川が村の中央を南流し、途中西に流れを変えている。平田村の南端には、標高819.2mの芝山に水源をもつ平田川が東から西に流れ、玉川村との村境で北須川と合流している。こうした小河川とその支流の両岸には、わずかながら谷底平野が発達している。玉川村に比べ平坦地の割合は低く、より起伏に富んだ丘陵部が、平田村内の大部分を占めている。

平田村の丘陵部はスギなどの植林が盛んで、森林面積の約半分を占めている。平田村では、農業とともに林業が基幹産業のひとつとなっている。針葉樹の植林地以外ではアカマツや落葉広葉樹からなる雑木林が面積を占め、また蓬田岳の上部ではブナの自然林をみることが出来る。谷底平野の多くは水田として利用され、また丘陵裾部の緩斜面は当地域で盛んな葉タバコを始めとする畑地や、牧草地として利用されていることが多い。(今 野)

引用・参考文献

玉川村 1980『玉川村史』

平田村 1999『平田村史 第一巻 通史編』

第1編 ^{はたけ}畑 ^{なか}中 遺跡

遺跡記号 TG-HTN

所在地 石川郡玉川村大字吉字畑中

調査期間 平成17年9月13日～10月21日

調査員 山岸英夫・宮田安志・今野徹・山元出

第1章 遺跡の環境と調査経過

第1節 位置と地形

畑中遺跡は、石川郡玉川村大字吉字畑中に所在する。JR水郡線の川辺沖駅より北東方向へ約3.5km、福島空港から南東約2.3kmに位置する。約100m南西に中下B遺跡が、約200m西方には平成13年度に調査された宮ノ前A遺跡や中下遺跡が隣接する。

本遺跡が所在する吉地区は、複雑に伸びた丘陵と、狭い谷地部からなる。現在における本遺跡周辺の土地利用をみると、丘陵はおもに山林、比較的傾斜の緩い丘陵裾部は畑地や宅地、谷地部は水田である。本遺跡は、南西から北東に伸びる丘陵の尾根部とその両側に下る斜面からなる。尾根筋

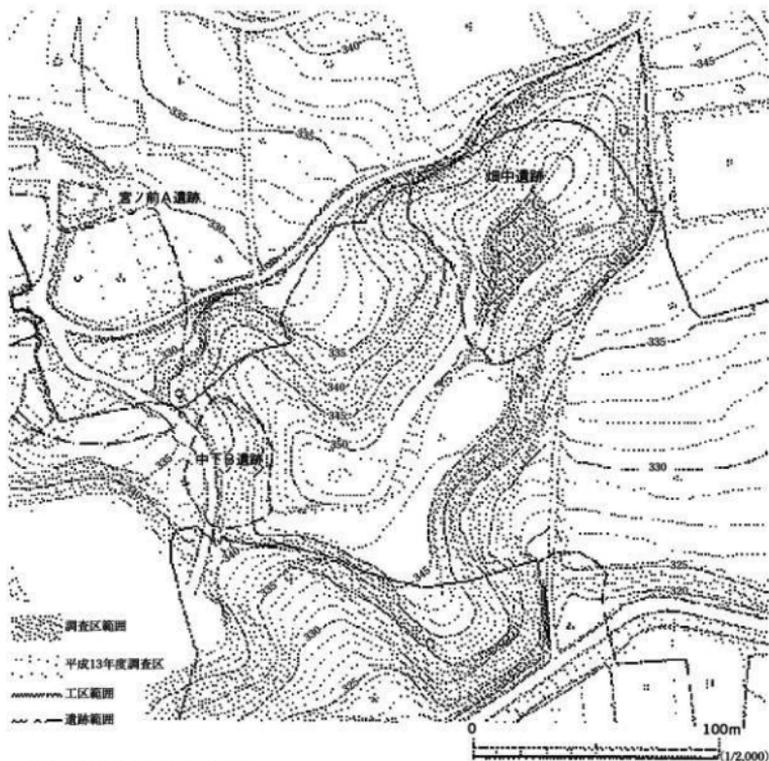


図1 畑中遺跡調査区位置図

は比較的平坦だが、斜面下方に向かうにつれ、斜度を増している。丘陵の周囲は急峻に切れ落ち、谷地部へと続いている。調査区の標高は丘陵頂部で約355m、最も低い南東斜面下端で約350mあり、5mの高低差がある。発掘調査直前の現況は山林であったが、聞き取り調査によると、近年まで畑地として利用されていたとのことである。調査区の西寄りにみられる削平部分は、畑地を造成した際のものと考えられる。また数十年前まで、近在では炭焼きが行われていた。

第2節 調査経過

畑中遺跡は、平成9年度の表面調査の際に土師器が採取されたことから、奈良・平安時代の散布地として登録された（『福島県内遺跡分布調査報告4』）。また、丘陵頂部で確認された小規模な塚が、「畑中塚」として埋蔵文化財包蔵地台帳に登録されている。福島県教育委員会では、平成16年8月17日から24日にかけて、財団法人福島県文化振興事業団に委託して試掘調査を実施した。その結果、木炭焼成土坑1基が確認された。このことから、塚を含む丘陵尾根頂部付近の1,000㎡が保存を要する範囲とされた。福島県教育委員会は、あぶくま高原道路工区内の当該箇所における発掘調査を、委託契約に基づき平成17年8月11日付けて財団法人福島県文化振興事業団に指示した。これにより、財団法人福島県文化振興事業団遺跡調査部では、平成17年9月13日から同年10月21日にかけて、調査員を配して畑中遺跡の発掘調査を行った。以下はその調査経過である。

9月13日、まず調査区の確認を行った。それとともに、調査区及び調査連絡所用地の草刈りを業者に委託して実施した。同日中に調査連絡所と仮設トイレの設置も行っている。調査連絡所は、畑中遺跡の隣接地に車両が入れないため、工区内の中下B遺跡西側に設置することとした。9月20日には発掘器材を搬入した。9月26日には作業員により、調査連絡所から畑中遺跡までの通路の整備や、伐採木等の片付けを行った。スズメバチの巣の存在が懸念されたことから、作業は慎重に行われた。9月27日からは1号塚周辺を残し、重機による表土除去作業を実施した。表土除去作業は太い木の根を残して行い、これに3日を要した。排土は、調査区外の北側と南側の2ヶ所に設けた置き場に集積した。重機による表土除去作業が終了した後、10月4日と6日に測量基準杭を業者に委託して打設した。また、同時期に作業員による遺構検出作業を開始した。検出作業は根根を挟んでまず南東斜面から実施し、試掘調査で検出された土坑（1号土坑）を再確認した。続けて2号土坑や1号性格不明遺構、1～3号溝跡等を検出した。南東斜面の遺構検出が終了した後、北西斜面の遺構検出に移行したが、遺構は確認されなかった。10月初旬からは、検出した遺構について順次精査を行った。1号塚に関しては、10月5日に塚の現況写真撮影を行い、7日には塚及び周辺の地形測量を実施した。翌日から断ち割り作業に入り、10月19日までに土層の記録等を終了した。

10月20日には全ての遺構の精査を終了し、調査区内全域の地形測量及び全景写真撮影を行った。10月21日には器材を撤収、仮設トイレを撤去し、調査を終了した。なお、調査連絡所は器材庫として残存させることとなった。11月8日、福島県教育委員会、あぶくま高原自動車道建設事務所、財

団法人福島県文化振興事業団の各担当者により、現地において調査成果や調査区及び排土の状況等が確認され、引き渡しを行った。

第3節 調査方法

畑中遺跡の調査では、本遺跡と隣接する各遺跡との位置関係を把握するため、また調査区内の遺構の位置を示すために、国土座標を用いている。国土座標区系を基準とした10m四方の方眼を調査区全域に設定し、これをグリッドと呼称した。基準となる国土座標は、当該事業で調査した近隣の宮ノ前A遺跡や中下遺跡等（『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告15』）と同じ日本測地系を用いた。国土座標X=133,410, Y=54,230を原点とし、東西に50m、南北に70mある調査区に、計35拵のグリッドを設定した。グリッドの呼称は、1拵ごとに西から東に向かってアルファベットのA・B・C…、北から南に算用数字の1・2・3…という記号を与え、この組み合わせで表示している。グリッド番号は、調査区内における遺構の大まかな位置と、遺構外出土遺物の出土位置を示すために用いている。

平面図の作成にあたっては、さらに1m方眼の測量基準線を設けた。1m方眼は、一辺10m四方の1グリッドを東西南北に各々10分割して設定した。測量基準線の表示には、国土座標の数値をそのまま用い、本書の挿図中にも示している。遺構の平面図を作成する際の縮尺率は1/20を基本とし、塚や1号溝跡など大型の遺構に関しては1/40、調査区全体の地形測量には1/100等の縮尺率を適宜用いた。なお、測量基準点及び水準点の設定は、近在に利用可能な基準点が存在しなかったことから、業者委託により全球測位システム（GPS）を用いて行った。

発掘作業での表土剥ぎは、おもに重機で行っている。ただし1号塚とその周辺に関しては、塚の裾部がどこまで広がっているのか地表面からの観察では把握できなかったため、人力で行った。表土剥ぎ後は、人力により唐鍬や草削り等を使用して遺構の検出作業を実施した。その際の排土処理には一輪車を用い、調査区外に設定した排土置き場まで運搬した。排土置き場は調査区外の南北端2ヶ所に設けたことから、作業箇所の移動に伴って、無理なく排土することができた。

各遺構を掘り込む場合は、遺構の大きさを考慮して土層観察帯を設定し、写真撮影及び実測を行った。例えば、塚は4分割法、土坑等は2分割を採用している。土層の表記方法については、基本土層はアルファベットの大字とローマ数字を用いてL I・L II…と示し、各遺構の堆積土は、小文字と算用数字の組み合わせで、l 1・l 2…と表記した。写真は、35mm判のモノクロとカラーリバーサルフィルムをおもに用いて撮影し、塚や遺跡の全景写真などには6×4.5判のカメラも使用した。遺跡の全景写真撮影にあたっては、福島空港が近在し、空中写真撮影が許可されない事情もあり、ローリングタワーを使用した。発掘調査で得られた記録・遺構写真等の資料は、当事業団の整理基準に準拠して整理を行い、報告書作成終了後、それぞれの台帳を作成し、福島県文化財センター白河館に保管する予定である。

第4節 歴史的環境

今回調査した畑中遺跡が所在する玉川村では、昭和50年代以降、国営総合農地開発事業や福島空港建設、福島空港・あぶくま南道路建設、県道改修等の公共事業に伴い発掘調査が行われている。

玉川村周辺で古くから知られている旧石器時代の遺跡には、須賀川市乙字ヶ滝遺跡や岩瀬郡鏡石町の成田遺跡がある。乙字ヶ滝遺跡からはナイフ形石器などが出土している。また成田遺跡では、故首藤保之助氏によって石刃技法を用いた剥片やナイフ形石器が採集されている。玉川村内においては、小高地区に所在する江平遺跡があり、ナイフ形石器を含む石器群が出土している。

縄文時代の遺跡は、玉川村竜崎地区に所在する原作田遺跡や後期の土偶が出土した上代遺跡などが知られている。畑中遺跡の近在では、兎田遺跡で前期初頭の竪穴状遺構2基、堂平D遺跡では中期末～後期初頭とみられる竪穴住居跡が1軒調査されている。また宮ノ前A遺跡では、加曽利B式期の土器がまとめて出土している。江平遺跡、栗木内遺跡や池ノ上遺跡、兎田遺跡では落し穴状土坑が検出され、このうち兎田遺跡では、19基の落し穴状土坑が規則性をもって配されていた。畑中遺跡周辺で調査された遺跡を見る限り、縄文時代この近辺には、丘陵部に小規模な集落が営まれ、またその周辺が狩場や採集の場として利用されていたと推察される。

畑中遺跡に近在する弥生時代の遺跡では、中下遺跡から弥生時代中期の土器片が出土し、該期の住居跡の可能性のある遺構が調査されている。堂平E遺跡では、川原町口式の遺物や土坑が確認されている。また栗木内遺跡では弥生時代の遺構とみられる8基の土坑が調査され、うち1基から菅玉が出土していることから、墓坑である可能性が指摘されている。

古墳時代では、銅鋼や玉類等の副葬品が出土した中地区の後作田古墳や、切石で組まれた横式石室を有する川辺地区の宮前古墳など、多くの古墳が阿武隈川東岸に分布している。また当該事業では、高原遺跡、江平遺跡、栗木内遺跡が調査された。これらの遺跡は古墳時代中期から後期の集落跡で、江平遺跡ではこの段階の群集墳も確認されている。

奈良～平安時代では、江平遺跡において門や四面庇をもつ大型の建物跡をはじめとする多数の遺構が確認された。堂平B遺跡では、「石川」とへら書きされた須恵器の破片が出土し、白河郡石川郷との関連や、石川氏との関連が注目されている。栗木内遺跡では8～11世紀の竪穴住居跡等が調査され、竪穴住居跡からは八稜鏡が出土している。畑中遺跡近在の金波B遺跡や堂平D・F・G遺跡などでは、丘陵の頂部や斜面を利用して数軒単位の集落が営まれていた様相が窺える。

古代末から中世は、石川氏の支配地として発展し、大寺城跡などの城館跡が多数分布している。天正18年（1590年）に豊臣秀吉が行った奥州仕置以降は、会津領や白河領、天領と支配が変化して近代にいたっている。畑中遺跡近在では、宮ノ前A遺跡から17～19世紀前半の搬入品を含む陶磁器がまとめて出土し、比較的富裕な階層が吉地区に在住していたことが想定されている。また、小半弓遺跡に代表されるように、製鉄の盛んな地域であったと考えられている。（今野）

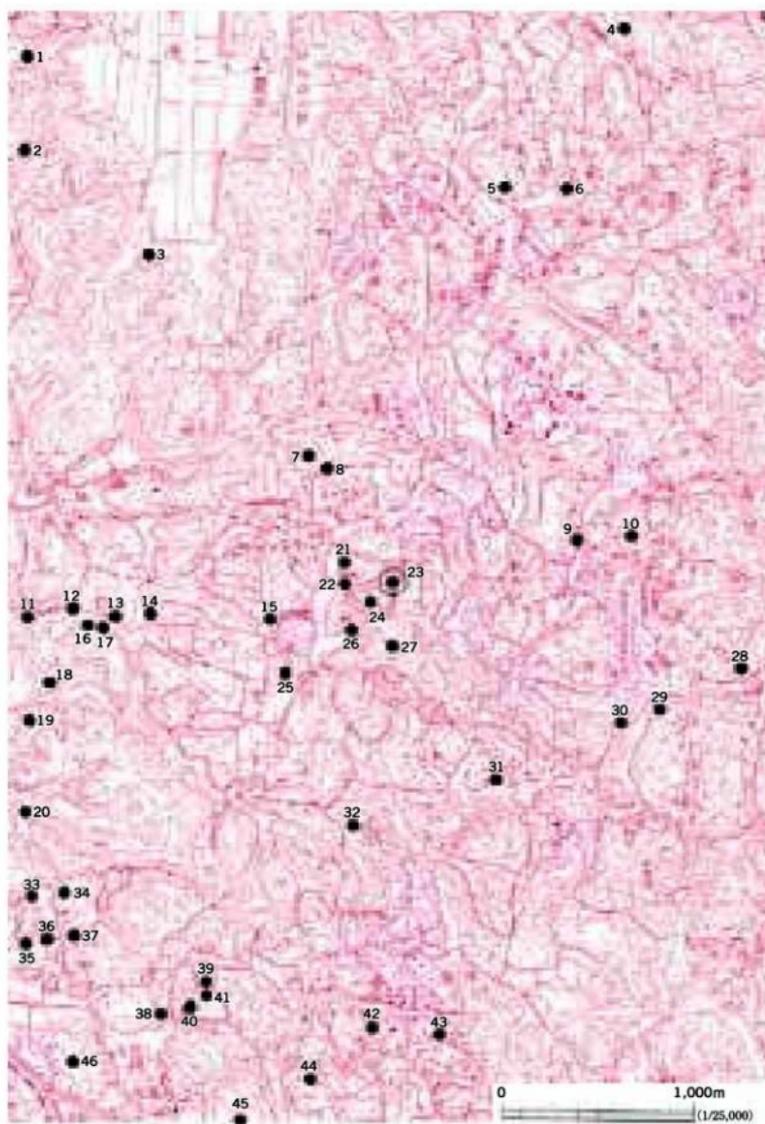


図2 畑中遺跡周辺の遺跡

表1 関連する周辺の遺跡

番号	遺跡名	所在地	備考
1	大槻城跡	石川郡玉川村大字岩法寺字中ノ町	中世城館跡
2	宮ノ前A遺跡	石川郡玉川村大字岩法寺字宮ノ前	奈良・平安時代散布地
3	平ノ谷地A遺跡	石川郡玉川村大字小高字平ノ谷地	平安時代散布地
4	唐虫塚	須賀川市狸森字唐虫	塚
5	追分館跡	石川郡玉川村大字北須釜字追分	中世城館跡
6	栗木内館跡	石川郡玉川村大字北須釜字小泉	中世城館跡
7	兎田遺跡	石川郡玉川村大字南須釜字兎田	縄文・弥生時代集落 H13調査
8	池ノ上遺跡	石川郡玉川村大字吉字池ノ上	弥生時代散布地 H13調査
9	蔵ノ前遺跡	石川郡玉川村大字南須釜字蔵ノ前	奈良・平安時代散布地
10	大寺城跡	石川郡玉川村大字南須釜	中世城館跡
11	金波B遺跡	石川郡玉川村大字川辺字金波	奈良・平安時代集落 H10・11調査
12	堂平D遺跡	石川郡玉川村大字川辺字堂平	縄文・平安時代集落 H12調査
13	堂平A遺跡	石川郡玉川村大字川辺字堂平	縄文時代散布地 H12調査
14	堂平G遺跡	石川郡玉川村大字川辺字堂平	縄文～平安時代集落 H13調査
15	堂平C遺跡	石川郡玉川村大字川辺字堂平	奈良・平安時代散布地
16	堂平E遺跡	石川郡玉川村大字川辺字堂平	弥生時代集落 H12調査
17	堂平F遺跡	石川郡玉川村大字川辺字堂平	奈良・平安時代集落 H12調査
18	堂平B遺跡	石川郡玉川村大字川辺字堂平	縄文・平安時代集落 S60調査
19	山森田B遺跡	石川郡玉川村大字川辺字山森田	縄文時代散布地
20	山森田遺跡	石川郡玉川村大字川辺字山森田	縄文時代散布地
21	中下遺跡	石川郡玉川村大字吉字中下	平安時代集落 H13調査
22	宮ノ前A遺跡	石川郡玉川村大字吉字宮ノ前・中下	縄文～近世集落 H13調査
23	畑中遺跡	石川郡玉川村大字吉字畑中	塚・散布地 H17調査
24	中下B遺跡	石川郡玉川村大字吉字中下	散布地
25	吉村館跡	石川郡玉川村大字吉字馬場下	中世城館跡
26	宮ノ前B遺跡	石川郡玉川村大字吉字宮ノ前	奈良・平安時代散布地
27	塚田遺跡	石川郡玉川村大字吉字塚田・桶場	奈良・平安時代散布地
28	石橋遺跡	石川郡玉川村大字南須釜字石橋	縄文時代集落
29	栗踏石遺跡	石川郡玉川村大字南須釜字栗踏石	奈良・平安時代散布地
30	壇ノ下遺跡	石川郡玉川村大字南須釜字壇ノ下	縄文時代散布地
31	八木遺跡	石川郡玉川村大字南須釜字八木	縄文時代散布地
32	堂平遺跡	石川郡石川町大字曲木字和泉式部	縄文時代散布地
33	杉内E遺跡	石川郡石川町大字中野字杉内	奈良・平安時代集落 S55調査
34	杉内B遺跡	石川郡石川町大字中野字杉内	奈良・平安時代集落 S55調査
35	杉内D遺跡	石川郡石川町大字中野字杉内	縄文・奈良・平安時代散布地
36	杉内C遺跡	石川郡石川町大字中野字杉内	奈良・平安時代集落 S55調査
37	杉内A遺跡	石川郡石川町大字中野字杉内	奈良時代散布地
38	源平A遺跡	石川郡石川町大字曲木字源平	平安時代散布地
39	源平C遺跡	石川郡石川町大字曲木字源平	縄文・弥生時代散布地
40	源平B遺跡	石川郡石川町大字曲木字源平	縄文・奈良・平安時代散布地
41	源平遺跡	石川郡石川町大字曲木字源平	平安時代散布地
42	曲木館跡	石川郡石川町大字曲木字館	中世城館跡
43	新地館跡	石川郡石川町大字曲木字広久保	中世城館跡
44	金子館跡	石川郡石川町大字曲木字小和清水	中世城館跡
45	後田遺跡	石川郡石川町大字塩沢字後田	縄文・平安時代散布地
46	藤田城跡	石川郡石川町大字中野字堀の内・矢の内	中世城館跡

※番号は図2の遺跡番号を示している。

第2章 遺構と遺物

今回の調査で検出された遺構には、塚1基、土坑2基、溝跡3条、性格不明遺構1基がある。北東に伸びる尾根の頂部に塚が位置し、その他の遺構は、尾根から下る南東斜面より検出されている。遺物は、塚の積土及び表土から縄文土器4点、弥生土器11点の他、年代を特定し得ない土器の細片が11点出土している。ここでは、各遺構・遺物について、項目ごとに記述していく。

第1節 基本土層 (図3、写真2)

各層の特徴と堆積状況、遺構・遺物との関係等について概観する。

LⅠは、腐植土と近年の畑の耕作土からなる黒褐色土である。草の根による攪乱が著しく、特に締まりがない。調査区全域にみられ、層厚は12～30cmである。畑を耕作する際に深く掘削したとみられる調査区南西寄りに厚く堆積している。LⅠからは、わずかに遺物が出土している。

LⅡは、旧表土と考えられる黒褐色土である。LⅠに比べ、より色調が暗く締まりがある。調査区の北西斜面に遺存し、層厚は14～25cmである。塚の積土には、おもにLⅡ・Ⅲが用いられたと考えられる。LⅡ以下の土層から、遺物は出土していない。

LⅢは、LⅠ・Ⅱに比べ締まりがある暗褐色土である。畑を耕作する際に削されたとみられる調査区南西寄りの部分を除いて、ほぼ調査区全域に20～35cmほどの厚さで堆積している。1・2号溝跡は、LⅢを掘り込んで築かれていることが確認されている。なお、遺物は出土していない。

LⅣは、もっとも締まりがある黄褐色土で、遺跡の基盤層である。所々に、風化の進んだ花崗岩塊を含んでいる。調査区全域で確認され、塚を除く遺構の検出面は、LⅣ上面である。(今野)

第2節 塚

1号塚 (図4、写真3～5)

本遺構は、調査区中央からやや北に寄ったC3グリッドに位置する。丘陵頂部に立地し、本遺構が築かれた基底面の標高は354.3～354.5mである。本遺構は、「畑中塚」として調査以前より埋蔵文化財包蔵地台帳に登録されていたもので、土饅頭形の盛り上がりが確認されていた。また塚構築後に繁殖したとみられる樹齢40～50年ほどの大きな木の根が入り、攪乱されている部分がある。なお、本遺構の約10m南東に2号土坑が、約10m東には3号溝跡がある。

本遺構の平面形は、尾根筋に添うように北東-南西方向にやや長い楕円形である。長軸長は6.9m、短軸長は5.1m、塚頂部から基底面までの高さは92cmある。断面形は潰れた饅頭のような形を

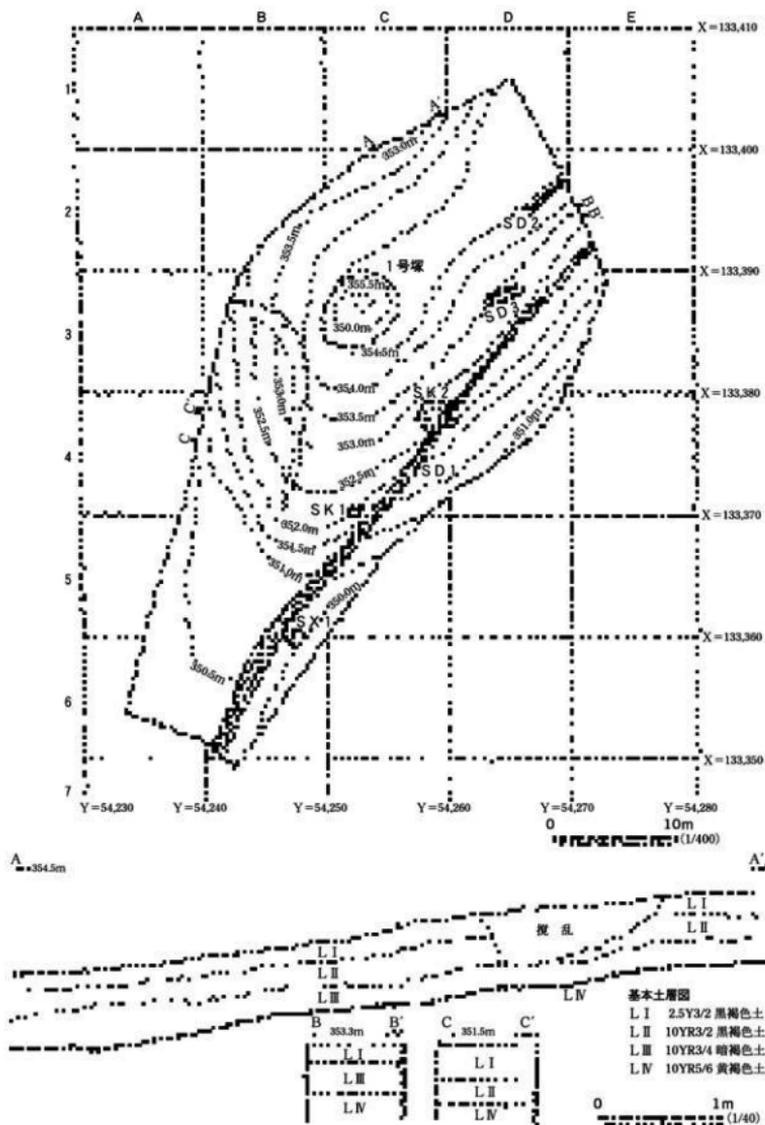


图3 遺構配置図と基本土層

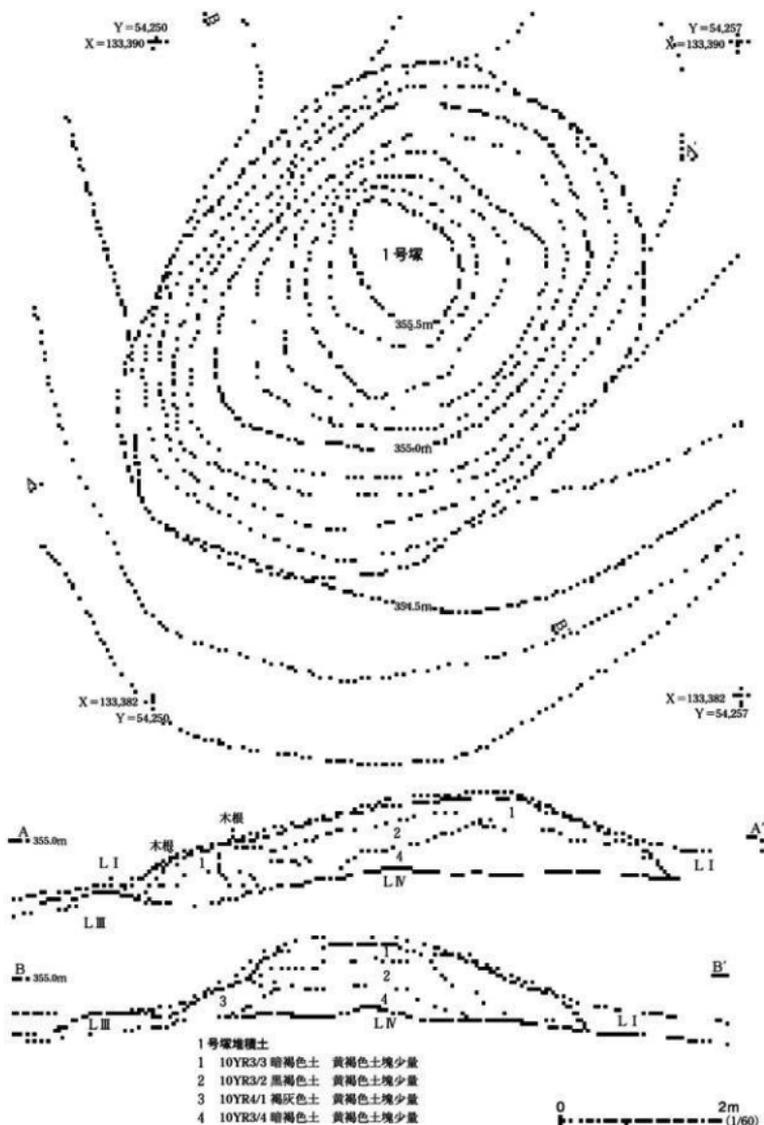


図4 1号塚

している。塚の積土は4層に分層した。表土直下のℓ1は、草の根の影響を受けたとみられ締まりがないが、ℓ2～4は締まりがある。いずれもLⅡに似た黒褐色土、あるいはLⅢに起因するとみられる暗褐色土などを基調としている。これにLⅣとみられる黄褐色土が塊状に混入する。本遺構の基底面には旧表土としたLⅡおよびその下層のLⅢが残存していない。以上のことから本遺構は、LⅡとLⅢおよびLⅣの上部までを積土として利用したものと考えられる。なお土層観察帯を除去した後、基底面での遺構検出作業を行ったが、内部施設等は確認されなかった。また、積土より縄文土器1点、弥生土器2点が出土しているが、本遺構と関連がないこと、少量であることから、遺構外出土遺物とともに別途図示した。

本遺構の構築時期は、関連する遺物が出土していないため不明であるが、近世以降の所産と考えられる。丘陵上に単独で存在することから、村境などを示すものとは考えにくく、民間信仰等に関連するものではないかと考えている。(今野)

第3節 土 坑

1号土坑 SK1 (図5, 写真5)

本遺構は、調査区中央よりやや南寄りのC4・5グリッドに位置する。丘陵頂部から緩やかに下る南東向きの斜面に立地し、その標高は352m前後である。平成16年度の試掘調査の際に検出された土坑で、今回の調査ではLⅣ上面において再確認された。本遺構と重複する遺構はなく、約1m東方に1号溝跡が、約10m南に1号性格不明遺構がある。

遺構内堆積土は3層に分かれた。ℓ1は、炭化物粒と焼土粒を少量含んでいる。ℓ2には焼土塊が含まれている。これは被熱した周壁の一部が崩落、混入したものとみられる。ℓ3は3～5cm大の木炭とみられる炭化物を含む黒褐色土層である。堆積土は、おもに斜面上方から自然流入したものと考えている。平面形は若干掘り過ぎたため明確でないが、隅丸の長方形とみられる。長軸は等高線と平行するようにN42°Eを示している。長軸長は上端で約110cm、下端で約90cm、短軸長は上端で86cm、下端では69cmである。底面は、中央付近がわずかに窪むがおおむね平坦である。周壁は、遺存状態のよい北西壁においては、垂直に近い角度で立ち上がっている。周壁の残存高は8～27cmである。周壁の北隅付近は、赤褐色に熱変化し硬化していた。

本遺構は、底部から木炭片が出土していることや周壁が被熱していることから、木炭焼成土坑と考えられる。遺物が出土していないためその所属時期は不明であるが、古代の所産ではないか。なお、本遺構から出土した木炭の放射性炭素年代測定の結果を、付編に掲載した。

2号土坑 SK2 (図5, 写真5)

本遺構は、調査区中央からやや西寄りのC・D4グリッドに位置する。丘陵頂部から下った南東向きの斜面に立地する。表土を除去後、LⅣ上面において検出された。検出面での標高は352.4～

352.9mである。本遺構は1号溝跡と重複し、本遺構の方が古いことを遺構検出時に確認している。また約7m北東に3号溝跡が、約8m南西に1号土坑がある。

遺構内堆積土は5層に大別した。ℓ1・3には、LⅡとみられる黒褐色土の塊が混じる。またℓ2～5には周壁から崩落したとみられるLⅣ塊が含まれている。堆積土はいずれも締まりがなく、周壁の崩落土を多く含むことから、自然堆積土と判断した。

平面形は不整な楕円形である。これは周壁が崩落したことに起因すると考えている。開口部での長径は281cm、短径224cm、下端では長径153cm、短径131cmである。底面は中央付近が窪む形状を呈し、周壁の高さは123～182cmである。周壁の立ち上がりは急峻だが、斜面上位側においては比較的緩やかな傾向がある。これは斜面上位側の周壁の方が、雨水などの影響でより浸食されたためであろう。本遺構の斜面下位側には、溝状の掘り込みがみられた。掘り込みの規模は長さ105cm、幅49～83cm、深さは30cm前後である。重複関係が確認されなかったことから、本遺構に付帯するものと考えている。なお、本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は、周壁の崩落が著しく、原形を保っていないとみられる。遺構内堆積土が自然堆積であることや大型の土坑であることから、貯蔵穴ではないかと考えている。その場合、溝状の掘り込みは、入り口部分であった可能性もある。その所属時期は不明であるが、LⅡが堆積土の中位まで混入しているため、中・近世頃の所産と想定される。(宮田)

第4節 性格不明遺構

1号性格不明遺構 SX1 (図5、写真5)

本遺構は、調査区南東端のB5・6グリッドに位置する。丘陵の尾根筋から下った南東向きの斜面において、LⅣ上面で検出された。検出面での標高は350m前後である。重複する遺構はなく、西側に1号溝跡が隣接し、北方に10mほど離れて1号土坑がある。

遺構内の堆積土は2層に分かれた。ℓ1は炭化物粒と焼土粒をわずかに含む黒褐色土で、おもに斜面上方から流入したものと考えている。ℓ2には周壁から崩落したとみられる焼土粒が多く含まれる。底面近くからは木質の炭化物も少量出土している。

平面形は隅丸の方形を呈しているが、斜面下位側の周壁が遺存しないため、本来の平面形や規模は不明である。北東壁・南西壁間の長さは145cm、北西壁から底面東端までの長さは115cmである。底面は概ね平坦で、斜面下方に向かってわずかに傾斜している。周壁の立ち上がりは緩く、周壁の高さは、最も残りの良い北西壁で22cmである。本遺構の周壁と底面は、被熱により著しく硬化していた。特に底面は青灰色に熱変化し、非常に硬く焼き締まっていた。なお、本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は、内面が被熱し硬化している点から、何らかの窯跡の一部ともみえるが、本来の形状や規模が不明なためその性格を特定できなかった。その所属時期についても不明である。(今野)

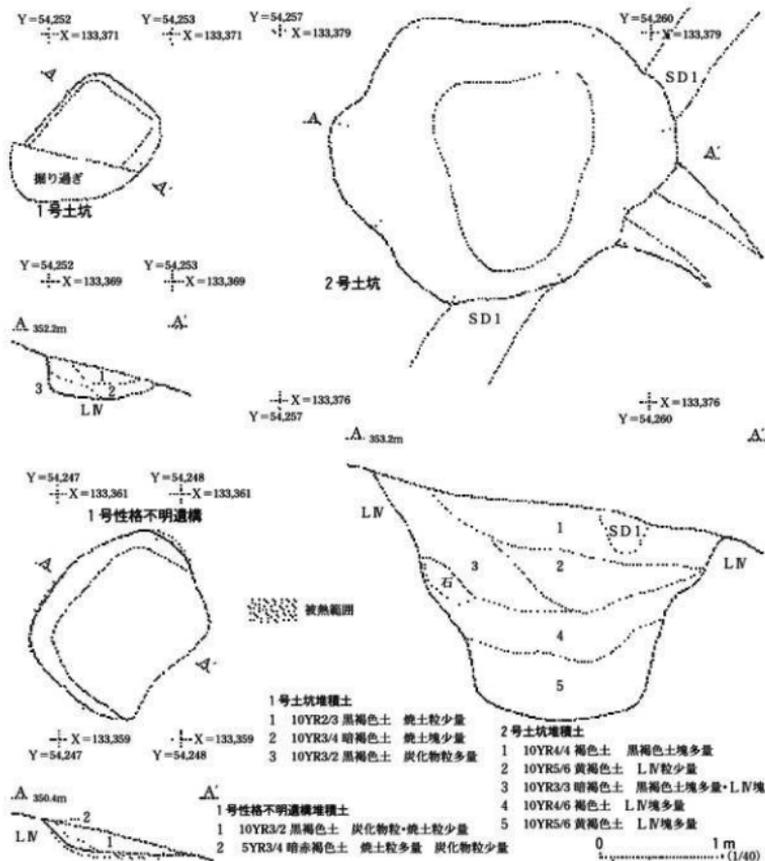


図5 1・2号土坑 1号性格不明遺構

第5節 溝 跡

1号溝跡 SD1 (図6, 写真6)

本遺構は、調査区北東隅のE 2グリッドから南端部のB 6グリッドにおよぶ長さ約52mの溝跡である。丘陵頂部から下った南東向きの斜面に、尾根筋と平行するように走り、南北両端とも調査区外に続いている。表土を取り除いた段階で、L/V上面において検出されたが、土層観察の結果、表土直下のLⅢを掘り込んでいることが確認された。検出面の標高は350.5～352.7m、底面の標高は

349.7m～352.6mあり、底面は、地形に沿って北東から南西に緩やかに下っている。本遺構は2号土坑と重複し、本遺構の方が新しいことを遺構検出時に確認している。

遺構内の堆積土は4層に分かれた。ℓ1は、LⅡに近似した砂質の黒褐色土である。ℓ2～4は、LⅢまたはLⅣに起因するとみられる砂質土である。堆積土はいずれも締まりがなく、周囲から流れ込むような堆積状況をなしていることから、自然堆積土と判断した。

本遺構の幅は、開口部で0.3～1.2m、底面では0.2～0.3mである。横断面形は、遺存状態の良い南西端においては、下半が狭く、壁の立ち上がり中程から開口部にかけて大きく広がる形状をしている。B5～B6グリッドにかけては、壁中段から開口部にかけて広がる部分が、テラス状に遺存しているのが確認された。なお、本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は、2号土坑と重複し、これより新しいことから、おそらくは近世以降の所産であろう。聞き取りによると、付近は近年まで山道として使用されていたとのことで、調査区外に1号溝跡と繋がるとみられる道跡を確認することができる。当初は畑または土地境などを示す溝として掘られ、ある程度埋まった後は、道として利用されたものであろう。

2号溝跡 SD2 (図6, 写真6)

本遺構は、調査区北東隅のD2グリッドで確認された溝跡である。丘陵頂部から下る南東向きの斜面に立地し、等高線と平行するように走っている。本遺構はLⅣ上面において検出されたが、表土直下のLⅢ上面から掘り込まれていることが、土層観察により確認された。

本遺構の南西端は攪乱されて遺存せず、また北東側は調査区外に続いている。このため本遺構の全容は不明だが、調査区内における長さは4.3m、幅は0.2～0.4m、深さは4～22cmである。底面の標高は354.4m前後で、溝跡両端の高低差はほとんどない。本遺構と重複する遺構はなく、本遺構の約6m南東に1号溝跡が平行するように走っている。溝内の堆積土は1層のみで、水成堆積の様相は確認できなかった。LⅢを基調とした暗褐色砂質土からなり、周壁からの崩落土や周囲から自然流入したものと考えている。なお、本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は、表土直下より掘り込まれていることから、おそらくは近世以降の所産ではないかと考えている。1号溝跡と平行してあることから、同時期に機能していた可能性がある。1号溝跡同様、土地境などを示す溝、あるいは道跡であろう。

3号溝跡 SD3 (図6)

本遺構は、調査区北東寄りのD3グリッドで確認された溝跡である。丘陵頂部から下る南東向きの斜面に立地し、検出面はLⅣ上面である。本遺構と重複する遺構はなく、本遺構の約1m南東に1号溝跡が、6m北方に2号溝跡がある。

溝の両端は削平されて遺存しないが、残存長は3.6m、幅は0.5～0.6m、検出面から底面までは最も深いところで15cmである。底面の標高は353.2～353.4mあり、南西から北東に向かってごく緩

やかに下っている。遺構内の堆積土は1層のみで、LⅢに似た暗褐色砂質土である。堆積土中に土塊などを含まず、全体に均質なことから自然堆積土と判断した。なお、本遺構から遺物は出土していない。本遺構は、1・2号溝跡と近接していること、堆積土が類似していることなどから、1・2号溝跡と近い時期に機能し、同様の性格を有していたと考えている。(宮田)

第6節 遺構外出土遺物(図7, 写真7)

塚の横土及び表土から土器片26点が出土している。塚から出土した遺物については、塚の年代と関連するとは考えにくく、また少量であるため、遺構外出土遺物と一括して図示した。

図7-1~3は縄文土器である。器壁は6~9mmと比較的厚手である。胎土には径1mm前後の小石が多く混入している。1・2には単節LRが横位に回転施文されている。3は磨消縄文によるモチーフを有する土器片で、縄文時代後期の所産であろう。縄文原体はLRで、沈線は先端の丸い棒状工具によって施されている。同図4は底部資料である。胎土の特徴が1~3に近似することから、縄文土器と考えている。底面には、わずかにナデの痕跡がみられる。

図7-5~12は弥生土器と考えている。小片のため器種は不明だが、9は壺か壺の底部に近い破片、10は同じく胸部上半の破片であろう。器壁は4~6mmと、1~3に比して薄い。5~8には、1本描きの沈線文が施されている。5~7が串状の工具で施文されているのに対し、8にはやや太い先端の丸い工具が用いられている。5にはコの字状の、6には重三角文とみられるモチーフが描かれている。5~7は弥生時代中期中頃の、8はそれよりやや古い時期の所産であろう。9~12は地文のみの破片で、いずれも直前段多条の縄文とみられる。(今野)

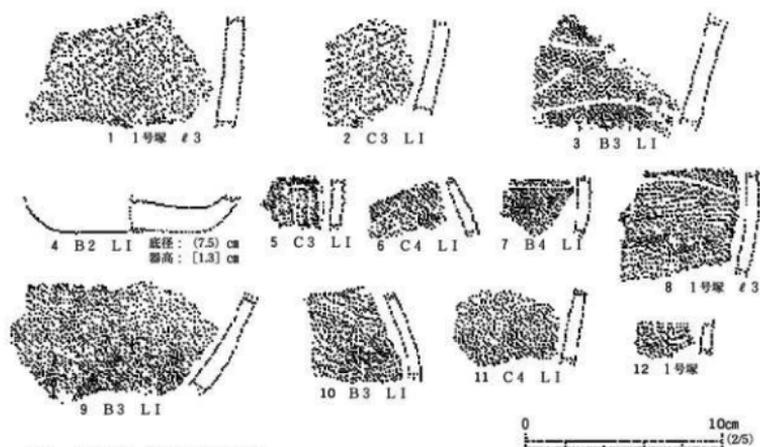


図7 1号塚・遺構外出土遺物

第3章 ま と め

今回、畑中遺跡で調査された遺構には、塚1基、土坑2基、性格不明遺構1基、溝跡3条がある。尾根の頂部に1号塚が占地し、その他の遺構は尾根から下る南東斜面に集中している。また1号塚の積土や表土から、縄文・弥生時代の土器片が少量出土している。

畑中周辺の遺跡をみると、宮ノ前A遺跡では加曾利B式期の土器が出土している。また中下遺跡では、弥生時代中期の土器片と該期の住居跡の可能性のある遺構も調査されている。この他にも落とし穴状土坑が確認された池ノ上遺跡、兎田遺跡、栗木内遺跡や縄文・弥生土器の出土をみた堂平D遺跡、堂平E遺跡などが点在する。以上のような状況から、縄文時代から弥生時代にかけては、畑中遺跡の近在に小規模な集落が存在し、畑中遺跡には散発的に人が入り、狩猟や採集の場となっていたものと推定される。

古代の可能性のある遺構に木炭焼成土坑とした1号土坑がある。1号土坑から出土した木炭の放射性炭素年代測定を行ったところ、8世紀代の可能性が高いとの結果を得た。阿武隈高地西端は中・近世と推定される製鉄遺跡が多い地域であるが、古代から中・近世にかけての時期に、畑中遺跡やその周辺においても、丘陵の樹木を利用して製鉄・鍛冶関連の炭が焼かれたと推察される。

1号塚は周囲の土を盛って築かれ、土坑などの付属施設は持たない。塚に伴う遺物も出土しなかったため、墓である可能性は低いと考えている。周囲に他の塚はなく、見晴らしの良い丘陵頂部に単独で存在する。塚の立地や性格による分類は、西白河郡泉崎村に所在する下滝山塚群の報文に詳しい(小熊1989)。報文によれば、畑中遺跡の1号塚のような立地条件は、須賀川市雨田の舌内塚や大栗に所在する栗木塚に類似し、1号塚は民間信仰に関連するものと考えられる。玉川村には「講」と名のつく民間信仰が非常に多く、昭和の初め頃までかなり盛ん(玉川村1980)であったことから、1号塚が「庚申塚」であった可能性が想起される。また須賀川市栗木塚は、初西の日に塚に集まり祭りをしたと伝えられている(大河1983)。玉川村内においても初西の祭りが行われていたことから、このような行事に関連した塚とも考えられる。いづれ確証はないが、1号塚はこのような民間信仰との関わりがなかで築かれたものであろう。また1号性格不明遺構については、出土した炭化物の放射性炭素年代測定を行ったところ、17世紀代との結果を得た。この時期の製炭もしくは製鉄に関連するものである可能性が考えられる。(今野)

引用・参考文献

- 玉川村 1980 『玉川村史』
 大河峰夫 1983 「栗木内塚」『母畑地区遺跡発掘調査報告13』 福島県教育委員会
 阿部俊夫 1988 「舌内塚・舌内板碑群」『母畑地区遺跡発掘調査報告25』 福島県教育委員会
 小熊博治 1989 「下滝山塚群」『矢吹地区遺跡発掘調査報告3』 福島県教育委員会

第2編 ほう き うち 蓬 来 内 館 跡

遺跡記号 HT-HUT

所在地 石川郡平田村大字下蓬田字蓬来内・行人塚

調査期間 平成17年10月19日～12月9日

調査員 山岸英夫・宮田安志・国井秀紀・
今野 徹・福田秀生・山元 出

第1章 遺跡の環境と調査経過

第1節 位置と地形

蓬来内館跡は、石川郡平田村大字下蓬田字蓬来内及び行人塚に所在する。本遺跡の250m北には主要地方道矢吹・小野線が東西方向に走っている。この矢吹・小野線と国道49号線の分岐点付近に所在する蓬田館跡からは南西方向に約2.0km、平成14年度に当該事業において調査された中根館跡からは、南南西に約2.3km離れている。また本遺跡の0.3km北方には武名坂館跡がある。また蓬来内館跡の尾根からは、北に蓬田岳を望むことができる。

本遺跡が所在する下蓬田地区は、大部分を占める丘陵と、北須川の支流によって複雑に浸食されたごく狭い谷底平野からなる。本遺跡は、南東から北西に細長く伸びる丘陵に立地する。今回の調査区は丘陵の先端部分にあたり、北西側に開け、急傾斜で周囲の水田に達している。遺跡の立地する丘陵頂部の標高は505m、水田の標高は約484mあり、21mの高低差がある。また、本遺跡の占地する丘陵の南西斜面は、畑地を造成する際に掘削されて崖状に切れ落ち、本来の地形を留めていない。調査開始前の状態は山林であったが、聞き取りによると近年まで丘陵頂部では、タバコ畑を営んでいたとのことである。

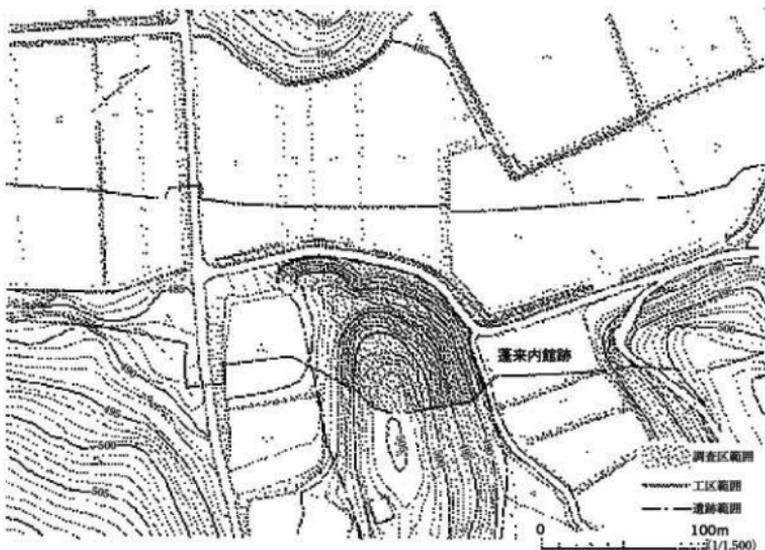


図1 蓬来内館跡調査区位置図

第2節 調査経過

蓬来内館跡は、中世城館跡として登録された周知の遺跡である。平成12年度の表面調査により、郭や平場が周知の範囲よりさらに東側にも存在することが確認されたため、遺跡の範囲が拡張された。福島県教育委員会では、あぶくま高原道路の建設工事に先立ち、平成17年9月29日から9月30日にかけて、財団法人福島県文化振興事業団に委託し、試掘調査を実施した。その結果、ピットや館の構築土とみられる土層等を確認した。このことから、削平を受けている南斜面の200㎡を除き、工区内の1,500㎡が要保存面積とされた。福島県教育委員会は、当該箇所における発掘調査を委託契約に基づき、平成17年10月11日付けで財団法人福島県文化振興事業団に指示した。これにより、財団法人福島県文化振興事業団調査部では、平成17年10月19日から同年12月9日にかけて、調査員を配して蓬来内館跡の発掘調査を行った。以下はその調査経過である。

10月19日、まず重機を用いて遺跡内に散乱していた伐採木の処理と、駐車場用地の造成等を実施した。10月25日には、調査連絡所と仮設トイレの設置を行った。同日より作業員9名の雇用を開始し、調査区及び調査連絡所周辺の安全対策を実施している。重機による表土除去作業は、伐採道と蓬来内館跡の周辺を廻る一般道を利用して斜面の上下両方向から実施した。排土は、工区内の館跡から見て東側と西側の2ヶ所に設けた置き場に集積した。重機による伐採木の処理と表土除去作業には、計3日を要した。なお、重機の乗り入れが不可能な1・2号平場と、重機のアームが届かない斜面中段は、手掘りによる表土剥ぎを余儀なくされた。このため斜面中段には、単管パイプや足場板を用いて作業用足場および転落防止用の柵を設置するなど、安全対策に努めた。

10月27日からは、作業員により本格的に1号平場の表土除去作業を開始した。人力による表土剥ぎで排出した土は、斜面下方の仮置場にまとめた。11月2日には、あぶくま高原道路の建設工事に用いられた国土座標値を基に、測量基準杭を打設した。11月7日からは、20名の作業員を追加雇用し、表土剥ぎが終了した部分について遺構検出作業を開始した。検出作業は1号平場と北及び西斜面から実施し、続けて2号平場へと移行していった。11月中旬からは、検出した遺構について順次精査を行った。11月21・22日には業者委託による地形測量を実施、同22日にはラジコンヘリコプターによる空中写真撮影も実施した。11月下旬からは1号堀跡の掘り込みやその記録を中心とした調査を行い、12月8日までに遺構の記録等を概ね終了した。また12月7・8日には、人手による排土搬出で斜面に溜まった土を、重機により排土置き場まで移動し、整形・填圧を施した。12月8日、業者に委託して発掘器材を畑中遺跡調査連絡所に搬送し、12月9日には調査連絡所と仮設トイレも撤去、全ての調査を終了した。

翌週の12月15日、福島県教育委員会、あぶくま高原自動車道建設事務所、財団法人福島県文化振興事業団の各担当者が発掘調査現地に集まり、調査成果や調査区及び排土の状況等を確認し、引き渡しを行った。

第3節 調査方法

逢来内館跡の調査では、本遺跡と隣接する各遺跡との位置関係を把握するため、また調査区内の遺構の位置を示すために、国土座標を用いている。国土座標は、平成14年度に平田村内で当該事業に係る発掘調査を実施した中根館跡（山岸ほか2004『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告17』）との整合性を図るため、世界測地系に基づいた。国土座標を基準とした10m四方の方眼を調査区全域に設定し、これをグリッドと呼称した。調査区の外、北西側にある国土座標 $X = 136,860$ 、 $Y = 63,890$ を原点とし、東西に80m、南北に50mある調査区に、計40桁のグリッドを設定した。グリッドの呼称は、西から東に向かって10mおきにアルファベットのA・B・C…、北から南に算用数字の1・2・3…という記号を与え、この組み合わせで表示している。グリッド番号は、調査区内における遺構のおおまかな位置を示すのに用いている。

遺構平面図の作成にあたっては、さらに1m方眼の測量基準点を設けた。1m方眼は、一辺が10mある1つのグリッドを、東西南北に各々10分割して設定している。挿図中の測量基準点の表示には、国土座標の数値をそのまま用いた。なお、調査区の測量基準点及び水準点の数値は、あぶくま高原自動車道建設事務所が設定した設計杭の数値をもとにした。調査区外に設定されていた工事用設計杭から、トータルステーションやレベル、箱尺を用いて、調査区内に必要な測量基準点を設置している。

遺構の実測図作成に際しては、土坑など小型の遺構に関しては $1/10 \sim 1/20$ 、平場や土塁の記録に関しては $1/20 \sim 1/40$ の縮尺を適宜用いた。調査区全体の地形測量は、調査区の大部分が急峻な斜面であることを考慮し、業者委託により実施した。地形測量における原図の縮尺率は $1/100$ 、等高線の間隔は50cmである。

発掘作業での表土剥ぎは、おもに重機を用いたが、重機が立ち入れない急斜面や平場については、唐鍬やスコップを用いて人力で行った。表土剥ぎ後は、草削り等を使用して遺構の検出作業を行った。その際の排土処理には、一輪車の他、調査区の斜面を利用して、足場板で作成した樋を用いた。また、斜面中段以下では、排土置き場に直接投棄した。平場や堀跡等を掘り込む際は、土層観察帯を設定し、写真撮影及び実測を行っている。土坑やピットに関しては、2分割により掘り込みを行った。土層の表記方法については、基本土層はアルファベットの太文字とローマ数字を用いてL I・L II…と示し、各遺構の堆積土は、小文字と算用数字の組み合わせで、 $\text{Q} 1 \sim \text{Q} 2 \dots$ と表記した。写真は、35mm判のモノクロとカラーリバーサルフィルムをおもに用いて撮影し、堀跡や平場、遺跡の全景写真などには 6×4.5 判のカメラも使用した。また、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影も実施し、周辺の地形を含めた写真記録に努めた。

発掘調査で得られた記録・遺構写真等の資料は、当事業団の整理基準に準拠して整理を行い、報告書作成終了後、それぞれの台帳を作成し、福島県文化財センター白河館に保管する予定である。

第4節 歴史的環境

蓬来内館跡が所在する平田村では、当該事業に係る調査の他にも、平田村教育委員会による発掘調査が行われている。旧石器時代の遺跡は確認されていないが、縄文時代の遺跡は多く、蓬田岳H・G遺跡や蓬来内B遺跡では早期の土器が出土している。中根館跡では、16基の落し穴状土坑が確認され、狩りや採集のための野営地であったと考えられている。入ノ坂遺跡では早期末葉から前期前葉と推定されている竪穴住居跡が調査され、瓦宿遺跡からは諸磯式に比定される有孔土器が出土している。中・後期では三斗蒔遺跡がよく知られており、当該期の竪穴住居跡が調査されている。晩期では、見上C遺跡において大洞A式期の竪穴住居跡が確認されている。

弥生時代の遺跡は少ないが、蓬来内B遺跡から前期の、江名竜B遺跡や酒洲遺跡からは中期とされる土器片が発見されている。また大柏木遺跡からは、後期に比定される壺形土器が出土している。

平田村では古墳は確認されていないが、隣接する石川町には前方後円墳2基と円墳7基からなる大壇古墳群がある。また平田村内の酒洲地区では4基の横穴墓が確認されている。古代において、現在の平田村は白河郡石川郷に属したと考えられているが、この時期の調査例も少ない。坪内遺跡では9世紀代の住居跡が確認され、「止」の字が書かれた墨書土器が出土している。

11世紀以降、前九年の役に従軍した源有光が後に石川と姓を改め、土着して石川地方を支配することとなった。石川有光は石川町に所在する藤田城や三蘆城を拠点としたとされ、その後石川一族はこの地方に広がり、南北朝時代には一族が兩朝に分裂して争っている。

この頃より村内各地に城館が築かれたと推察されるが、平田村には33箇所の中世城館跡が確認され、その数は福島県内の自治体平均の1.5倍を超えている。そのなかでも、中核的なものに蓬田館跡がある。蓬田館跡は蓬来内館跡の北東約2kmに位置し、現在の国道49号線に面している。蓬田地区は石川氏の所領の北辺に位置し、この地域を守備する拠点として蓬田館跡が築かれたと考えられている。蓬田館跡は文明3年(1471年)、蓬田秀光が館主として居住したとの記録があるが、現存する城郭は戦国末期の様相を示すことから、第5代法光が築いたと推定されている。この時期、当地域は蘆名氏や田村氏の進攻を受け、天正17年(1589年)には伊達政宗の支配下に入っている。

当地域には「金屋」、「金作」、「空釜」といった鉄に関する地名が多く、蓬田岳L遺跡や打違内E遺跡のような鉄滓散布地が確認されている。これらは中世末から近世にかけての製鉄遺跡と考えられ、蓬田氏の経済力を支えていたとも推測されている。

天正18年(1590年)、豊田秀吉の奥州仕置により、当地域は会津領として蒲生氏や上杉氏の支配下に入る。その後、白河藩となって丹羽氏や本多氏、松平氏の支配を受けるが、天和元年(1681年)と寛保元年(1741年)に幕府領に組み込まれ、一部が常陸土浦藩や常陸笠間藩の分領となる。幕末の戊辰戦争ではこの地域でも戦闘が行われ、中根館跡ではこの際に築かれたと考えられる防塁が調査されている。

(今野)

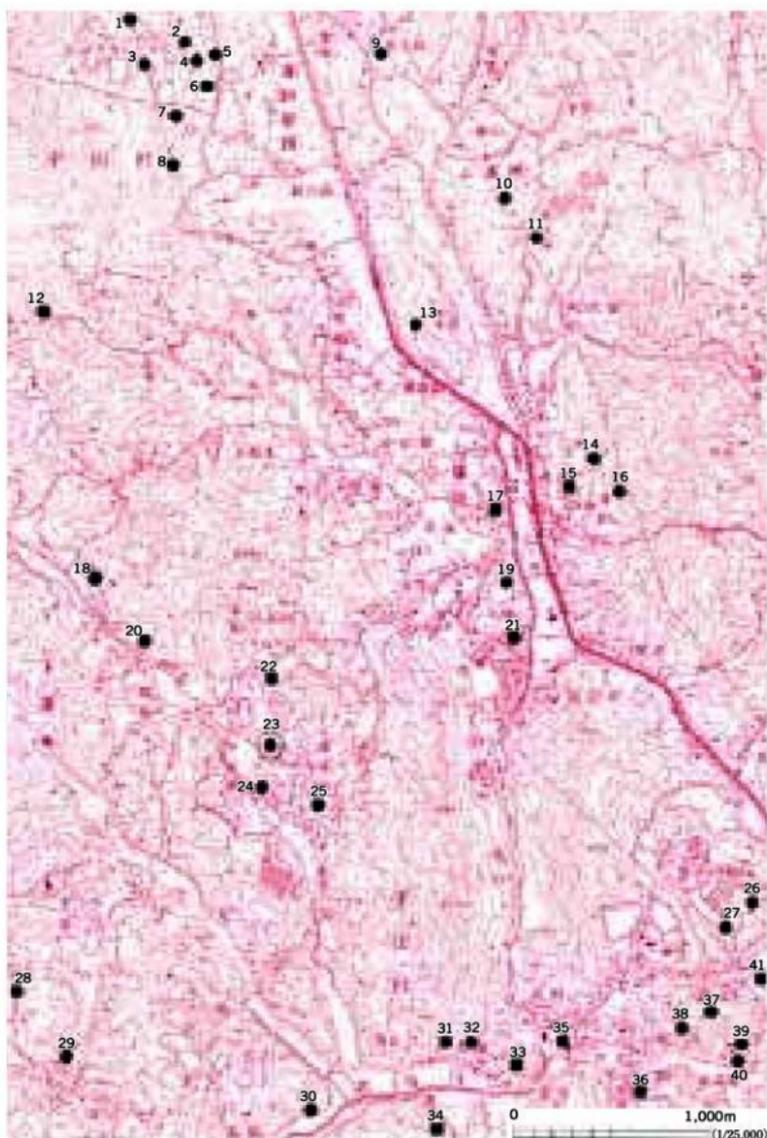


図2 蓬来内館跡周辺の遺跡 ■は城館跡を示す

表1 関連する周辺の遺跡

番号	遺跡名	所在地	備考
1	蓬田岳L遺跡	石川郡平田村大字蓬田新田字蓬田岳	中世・近世製鉄跡
2	蓬田岳E遺跡	石川郡平田村大字蓬田新田字蓬田岳	散布地
3	蓬田岳M遺跡	石川郡平田村大字蓬田新田字蓬田岳	中世・近世製鉄跡
4	蓬田岳G遺跡	石川郡平田村大字蓬田新田字蓬田岳	縄文時代散布地
5	蓬田岳F遺跡	石川郡平田村大字蓬田新田字蓬田岳	縄文時代散布地
6	蓬田岳H遺跡	石川郡平田村大字蓬田新田字蓬田岳	縄文時代散布地
7	蓬田岳I遺跡	石川郡平田村大字蓬田新田字蓬田岳	縄文時代散布地
8	蓬田岳K遺跡	石川郡平田村大字蓬田新田字蓬田岳	縄文時代散布地
9	堂久保遺跡	石川郡平田村大字上蓬田字堂久保	平安時代散布地
10	曲山遺跡	石川郡平田村大字上蓬田字曲山	奈良・平安時代散布地
11	程久保遺跡	石川郡平田村大字上蓬田字程久保	縄文・奈良・平安時代散布地
12	岳平遺跡	石川郡平田村大字上蓬田字岳平	縄文時代散布地
13	中根館跡	石川郡平田村大字蓬田新田字中根	防塁跡
14	法伝寺無縫塔	石川郡平田村大字上蓬田字館ノ前	石造物
15	蓬田館跡	石川郡平田村大字上蓬田字館ノ前	中世城館跡
16	法伝寺跡	石川郡平田村大字上蓬田字上宿	近世社寺跡
17	向館遺跡	石川郡平田村大字上蓬田字向館	中世城館跡
18	打違内D遺跡	石川郡平田村大字下蓬田字打違内	中世散布地
19	三斗碓遺跡	石川郡平田村大字上蓬田字三斗碓	縄文時代集落
20	打違内E遺跡	石川郡平田村大字下蓬田字打違内	中世・近世製鉄跡
21	橋本遺跡	石川郡平田村大字上蓬田字橋本	奈良・平安時代散布地
22	武名坂館跡	石川郡平田村大字下蓬田字武名坂	城館跡
23	蓬来内館跡	石川郡平田村大字下蓬田字蓬来内・行人塚	城館跡
24	蓬来内A遺跡	石川郡平田村大字下蓬田字蓬来内	縄文時代散布地
25	蓬来内B遺跡	石川郡平田村大字下蓬田字蓬来内	縄文時代散布地
26	坪内遺跡	石川郡平田村大字鶴子字坪内	奈良・平安時代散布地
27	酒州横穴墓群	石川郡平田村大字永田字酒州	古墳時代古墳
28	空釜遺跡	石川郡平田村大字下蓬田字空釜	縄文時代散布地
29	空釜B遺跡	石川郡平田村大字下蓬田字空釜	縄文時代散布地
30	瓦宿	石川郡平田村大字下蓬田字瓦宿	縄文時代散布地
31	小松原館跡	石川郡平田村大字小松原字大柿	城館跡
32	長伝寺跡	石川郡平田村大字小松原字大柿	社寺跡
33	生天目館跡	石川郡平田村大字小松原字大柿	城館跡
34	北向館跡	石川郡平田村大字小松原字北向	城館跡
35	平館跡	石川郡平田村大字永田字広町	城館跡
36	天王館跡	石川郡平田村大字永田字戸花	城館跡
37	酒洲遺跡	石川郡平田村大字永田字酒洲	縄文・奈良・平安時代散布地
38	江名籠A遺跡	石川郡平田村大字永田字江名籠	縄文・奈良・平安時代散布地
39	福田寺跡	石川郡平田村大字永田字江名籠	社寺跡
40	福田寺供養塔群	石川郡平田村大字永田字江名籠	中世・近世石造物
41	境館跡	石川郡平田村大字永田字酒島	中世城館跡

※番号は図2の遺跡番号を示している。

第2章 遺 構

今回の調査で確認された遺構は、堀と土塁を伴う1号平場と、それを帯郭状に取り囲む2号平場、土坑4基とピット5基である。このうち2・3号土坑とピットに関しては、館跡とは異なる年代の所産と考えている。以下では基本土層を踏まえうえて、各遺構について詳述する。

第1節 遺跡の概要と基本土層

基本土層 (図4, 写真8・10)

基本土層は4層に大別したが、いずれも基盤となる花崗岩の風化土を基調にしていると考えられる。1号平場と2号平場、あるいはそれより下位の斜面では、基本土層の堆積状況が大きく異なるが、この違いは、尾根の頂部と斜面という地形の差異もさることながら、平場の造成や後世の耕作に起因するところが大きいものと考えている。

- L I : 腐植土と近年の畑の耕作土をL Iとした。基本土層のなかでもっとも締まりのない砂質の暗褐色土で、調査区全体を覆っている。斜面では層厚10~15cmであるのに対し、1号平場では、25~48cmの厚さで堆積している。これは、1号平場において近年までタバコ畑を耕作していたため、腐植土が堆積しやすい地形であることによるものであろう。また、2号平場においても50cm前後の厚さで堆積している部分もあることから、あるいは館跡廃絶後、2号平場においても畑を耕作するなどの地形の改変が行われた可能性がある。
- L II : 締まりのない砂質の黒褐色土で、その色調は腐植土に近似している。L IIは1号平場にはみられず、2号平場の端部より下位の斜面において観察された。L IIの上位には、これも2号平場より下位にのみ観察された2号平場の \varnothing 5が堆積している。腐植土に似たその色調と、L Iとの間に間層を挟むことから、L IIは旧表土と考えている。
- L III : L IIIは砂質の黄褐色土で、L I・IIに比して締まりがある。1号平場にはみられず、2号平場とそれより下位の斜面に厚く堆積している。L IVがさらに風化・細粒化し、館構築以前に斜面に再堆積したものと考えている。遺構との関連をみると、2号平場のL III上面においては、1・4号土坑が検出されている。
- L IV : L IVは花崗岩の風化土で、丘陵を形成する基盤層である。硬いが、人力で掘削が可能な程度である。稀に、風化せずに残った花崗岩塊を含んでいる。1号平場では、L I直下に表出する。また遺跡周辺の崖では、L IVが露出した状態をみることができる。遺構との関連をみると、1号堀跡はL IVを掘り込んで造られている。また1号平場で検出された2・3号土坑やピットの大半は、L IV上面で検出されている。

1号平場 (図3~5, 写真6~8)

1号平場は、調査区南東端のF・G3・4グリッドに位置する。調査区内で最も高い丘陵頂部に立地し、その標高は504m前後である。今回調査した1号平場の範囲は南北に約13m、東西に約9mあるが、調査区外においても丘陵の尾根筋に沿うように広がっていることが観察できる。平場の上面は概ね平坦だが、丘陵先端に向かって緩やかに下っている。1号平場には、1号堀跡と1号土塁が付帯する。これらは館の施設として、一体となって機能していたものであろう。また1号平場では、土坑2基とピット5基が検出されている。しかし、堆積土の観察から本遺構より新しい時期の所産と判断し、別途扱った。

1号平場においてはLⅠの直下にLⅣが堆積し、LⅡ・Ⅲは観察されなかった。LⅡ・Ⅲはおそらく、平場を造成した際に削平されたものであろう。なお、1号平場にはLⅠが厚く堆積していることから、畑の造成に伴って、客土されている可能性もある。また、1号平場北斜面の堆積土を図4のC-C'に示した。1号平場の北斜面には、LⅡに起因するとみられる黒褐色土や、LⅢに似た褐色土、あるいはこれらが混和した色調の土が互層を成すように堆積していた。これらの堆積土は、特段締まりはなく、斜面に沿うように堆積しているため、整地層とは考えにくい。これらはおそらく、1号平場を造成した際に、斜面に廃棄された土であろう。

2号平場 (図3~5, 写真6・9・10)

2号平場は、調査区南東寄りのE~G3・4グリッドに位置する。2号平場の北側は、近年立ち木を伐採するために、重機が進入した際に若干の削平を受けているが、1号平場を取り囲む帯郭状に築かれていたものと推察できる。また2号平場は、調査区外にも続いていることが地表面の観察から窺われる。2号平場の標高は501m前後あり、1号平場より3mほど低い。重機で削平された部分を除いた2号平場の規模は、長さ約16m、最大幅は4.6mである。

2号平場においては、LⅢが基盤層である。LⅡは2号平場より下位の斜面にのみ残存している。また、2号平場とそれより続く斜面には、LⅠとLⅢとの間に、基本土層とは若干異なる特徴の土が堆積していた。その土層を図4のD-D'に図示した。2号平場のℓ1~4は、LⅣ粒を含む比較的締まりのある堆積土である。これらは蓬米内館跡が廃絶した後、1号平場やその周辺の斜面から崩落したものと考えられる。ただし、ℓ1~4には1号土塁や1号堀跡の堆積土に含まれる黒色土や黒褐色土粒が観察されなかった。1号土塁の積土が、2号平場側には崩落しなかったとは考えにくいことから、2号平場は1号土塁の崩落が落ち着いた後に、一旦削平された可能性がある。その後に、改めてℓ1~4が堆積したのではないかと考えている。ℓ5は、黒褐色土粒を含む砂質の褐色土である。ℓ5の堆積している範囲を図3に一点鎖線で示した。ℓ5は、2号平場の端部からその下方の斜面中位にかけて、LⅡを覆うように堆積している。このことから、ℓ5は2号平場が削平された折に、斜面に押し出された土ではないかと考えている。

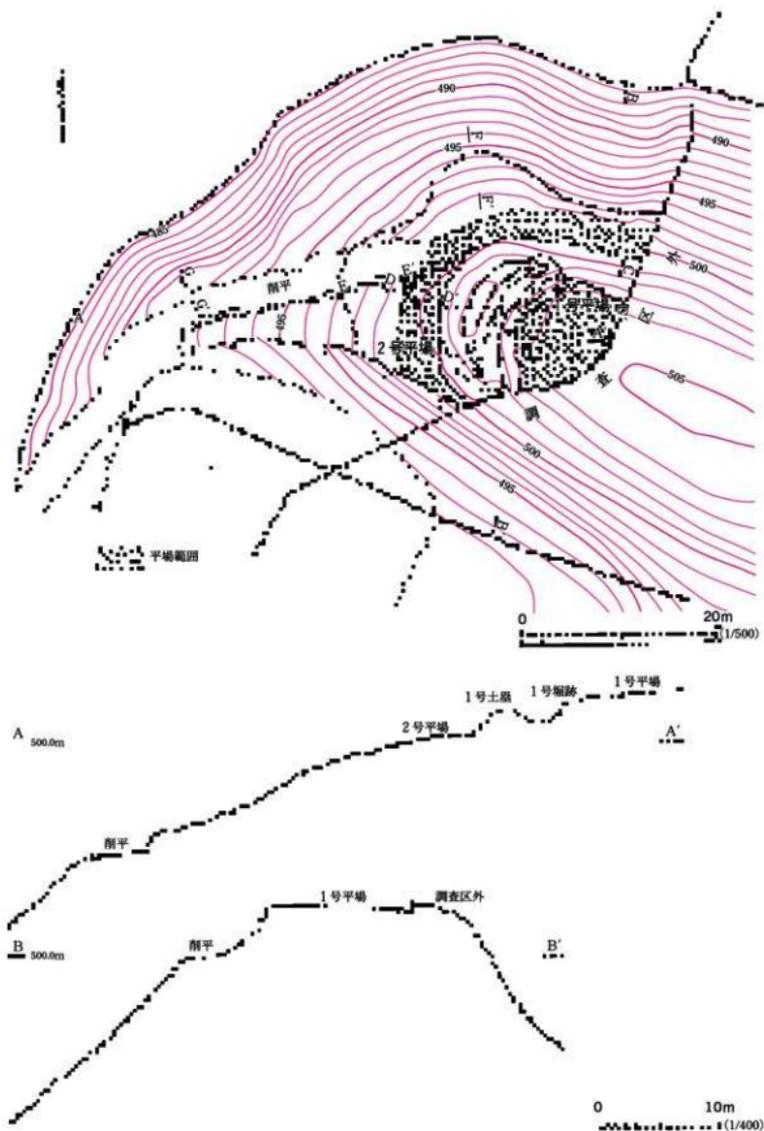


図3 蓬莱内館跡調査区全体図・エレベーション



基本土層

- L I 10YR3/4 暗褐色土
- L II 10YR2/2 黒褐色土
- L III 10YR5/8 黄褐色土
- L IV 10YR6/8 明黄褐色土

1号平場堆積土(C-C')

- 1 10YR3/4 暗褐色土 褐色土粒少量
- 2 10YR2/3 黒褐色土 暗褐色土粒少量
- 3 10YR3/4 暗褐色土 褐色土粒少量
- 4 10YR2/1 黒色土 暗褐色土粒・褐色土粒少量
- 5 10YR4/4 褐色土 黒褐色土粒少量

2号平場堆積土(D-D',E-E',F-F')

- 1 10YR4/4 褐色土 L IV粒少量
- 2 10YR3/3 暗褐色土 L IV粒少量,炭化物粒微量
- 3 10YR4/6 褐色土 L IV粒少量
- 4 10YR5/6 黄褐色土 L IV粒多量
- 5 10YR4/4 褐色土 黒褐色土粒微量

図4 基本土層, 1・2号平場土層

2号平場より下位は急峻な斜面となっている。2号平場の西端から続く尾根筋では比較的斜度が緩く、尾根は標高を減じながら西へと伸びて、館跡周辺の水田に達している。これに比して、尾根から下る北斜面は下方ほど斜度を増し、斜面下位では崖状になっている。調査区の北東端では、斜面の崩落によるとみられる抉れた箇所もあった。2号平場より下方の斜面部には、平場に通じる道跡などの存在が想定されたが、遺構は確認できなかった。

第2節 堀跡と土塁

1号堀跡 (図5・6、写真11~14)

1号堀跡は、調査区南東寄りのE・F3・4グリッドに位置する。1号平場のLⅣ上面において、比較的締まりのない褐色土の広がりとして捉えられた。本遺構は1号平場の外縁を囲むように在ることから、1号平場に付帯する遺構と考えている。また、本遺構の外側には1号土塁が巡り、本遺構と一体の防御施設として機能していたと推察される。3号土坑及びF4-P1が本遺構と重複し、本遺構の方が古いことを土層観察により確認している。

本遺構は1号平場の端部に沿って、緩やかに湾曲する形状をしている。堀底に立つと、堀跡の端からもう一方の端を望むことはできない。本遺構の長さは約16m、幅は上端で3.8~4.2m、下端では1.1~2.0mである。堀底は、中央付近の幅が狭くなる傾向が看取される。また堀底は、中央付近から両端に向かって下っている。その標高は中央付近で501.8mなのに対し、北端で500.5m、南端では501.0mである。この高低差は、堀底に雨水が溜まらないようにするためと、堀を見通しにくくする目的があったのではないかと考えている。本遺構の壁は急峻な角度で立ち上がり、底面と1号平場の高低差は1.5~1.9m、1号土塁の頂部との高低差は1.2m前後である。

1号堀跡の堆積土を図6に示した。ℓ1~9は、LⅡ~Ⅳを基調とした褐色土や黄褐色土からなるが、黒褐色土や黄褐色土の粒子や塊が混入している点において、基本土層と大きく異なる。図6のA-A'に示したように、いわゆるレンズ状の堆積をなしていること、整地層や土塁にみられるような締まりが確認されなかったことから、堀の両側から自然流入したものと判断した。堆積土中に土塊等が含まれるのは、土塁や整地層が崩落し、本遺構内に流入したためであろう。

ℓ10~15は、本遺構北端の東壁が、懸壇状になった部分にみられた堆積土である。この部分の長さは5.6m、幅は1.0~1.8mある。ℓ10~15は、その色調や黒色土や黄褐色土の塊を含む点はℓ1~9と共通しているが、薄く水平に堆積している点が異なる。また、ℓ12・15には、締まりもみられたことから、これらは整地土と判断した。おそらく、堀の立ち上がりを整えるために、整地したものであろう。

1号堀跡の底面からは、ビット4基が検出された。P1~3は、堀底の中央と両端にほぼ等間隔で配され、平面形が近似している。また各ビットの上半には、1号堀跡の堆積土が流入している。これらのことから、P1~3は1号堀跡に伴うものと判断した。またP4も、堀底で検出されたこ

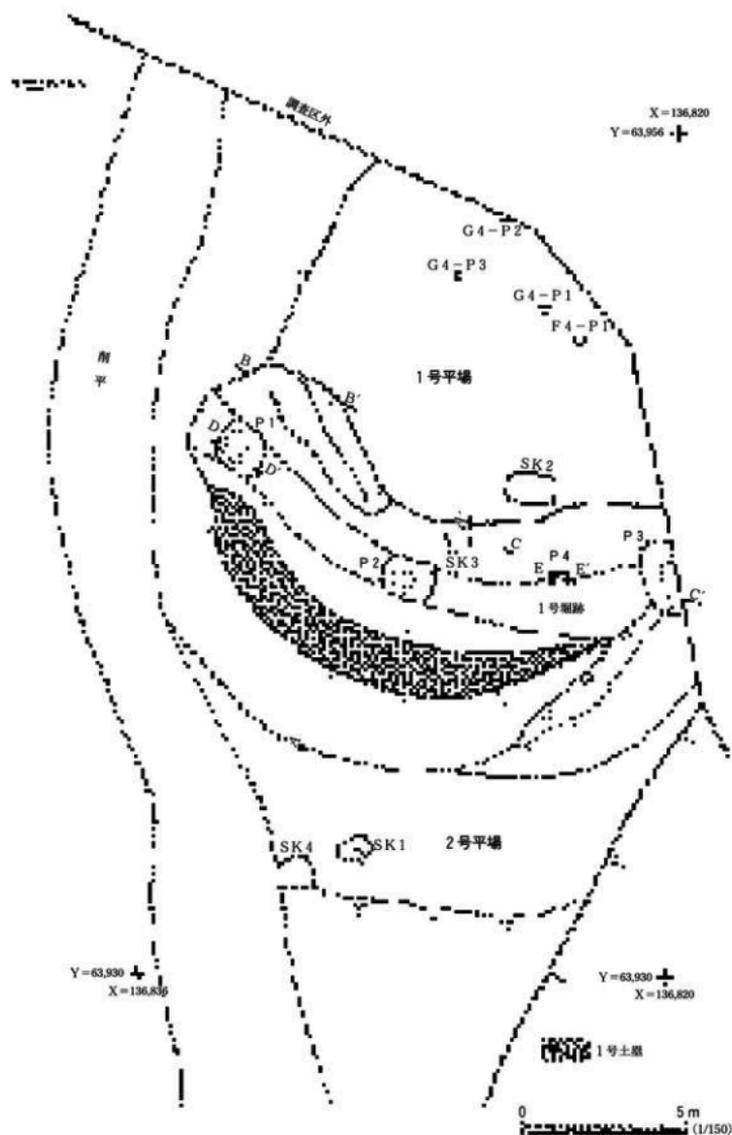


図5 1・2号平場

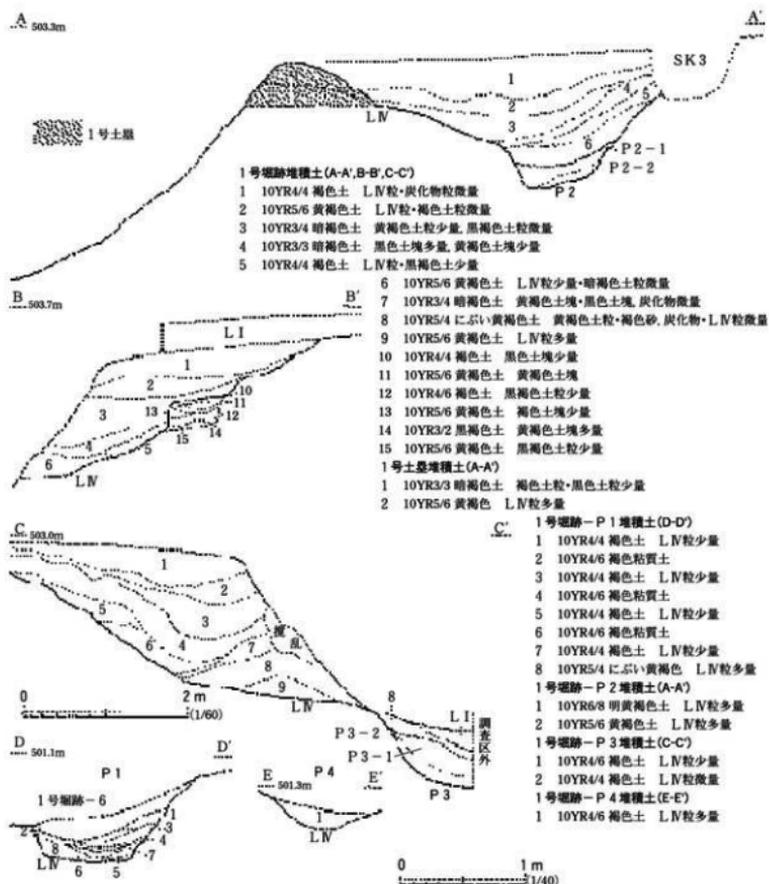


図6 1号堀跡・1号土層・P1～4土層

とから、1号堀跡に伴うものとして扱った。

P1は、1号堀跡の北端で検出された。P1の平面形はやや歪んだ隅丸の方形で、堀底にピットの長辺を沿わせるように設けられている。開口部の長軸長は134cm、短軸長は132cmである。底面の長軸長は91cm、短軸長は71cmと、開口部に比べ二回りほど狭い。周壁の高さは堀の中央寄り70cm、北端側で28cmと、P1を境に堀底に段差が付いた状態である。ピット内の堆積土は、8層に細分した。薄い砂質土と粘質土とが互層をなし、水成堆積の様相を呈している。P1は、堀底を流れる雨水などの影響により1号堀跡より先行して埋まり始め、そして最終的に1号堀跡の ℓ 6が流入

して埋没したものとみられる。P2は、1号堀跡底面のほぼ中央から検出された。P2の平面形は隅丸の長方形で、その長辺は堀底の下端と一致している。開口部の長軸長は159cm、短軸長は119cm、堀底から底面までの深さは82cmである。底面は長軸長63cm、短軸長44cmと開口部に比べ極端に狭い。ピット内の堆積土はLⅣ粒を多く含み、色調は1号堀跡の①6に近似している。P3は1号堀跡の北端に位置する。調査区境にかかるため完掘することはできなかったが、平面形は長方形になるものと思われる。その規模は、開口部で225cm、底面では135cmあり、P1・2に比べ一回り大きく、検出面からの深さも101cmと最も深い。堆積土は2層に分層したが、ともに1号堀跡の①8と近似している。また、P3の上半には1号堀跡の①8が流入している。P1～3は、堀底を通る際の、一種の障害として設けられたものと考えている。P4は、長軸長64cm、短軸長43cmの楕円形を呈した小穴である。堀底で検出され、深さは16cmと浅い。堆積土はLⅣに近似し、自然堆積土とみられる。

1号土塁 (図5・6、写真12・13)

本遺構は、調査区南東寄りのE・F3・4グリッドに位置する。尾根を横切るように、南北方向に長く築かれている。1号堀跡の西側法面と一体をなし、西方には2号平場が隣接する。LⅣを土手状に掘り残し、その頂部を平坦に整えて基底部として、その上にさらに盛土することで造成されている。調査時における本遺構の全長は18.5m、基底面の幅は最も遺存状態の良い中央付近で5.5mである。本遺構の頂部と1号堀跡底面との高低差は1.2m、2号平場との高低差は2.5mである。現況では、1号堀跡側の法面の方が、2号平場側に比べ勾配が若干緩やかになっている。

本遺構の盛土は2層からなる。①1には黒色土や褐色土の粒を、②2にはLⅣ粒を多量に含むことから、LⅡ～Ⅳが盛土に用いられたものと考えられる。おそらくは、1号堀跡を掘削した際の排土が、盛土として用いられたものであろう。①1・2とも締まりがあり、①1は特に硬い。盛土の高さは最大0.5m、盛土部分の全長は約15mあり、最大幅は中央付近で1.6mあり、両端に近づくほど幅を減じている。なお、本遺構の盛土が1号堀跡内に崩落したとみられるのに対し、2号平場側では、同様の堆積土を確認することができなかった。このことから1号土塁の西側は2号平場とともに、ある程度後世の掘削を受けている可能性がある。

本遺構は、尾根を横切る形で築かれた土塁である。勾配が緩く比較的侵入が容易な尾根筋の防備を固めるため、1号堀跡と一体となって機能していたものと考えられる。(今野)

第3節 その他の遺構

1号土坑 SK1 (図7、写真14)

1号土坑は、調査区南東寄りのE4グリッドに位置する。2号平場の堆積土を除去した段階で、



図7 1～4号土坑

LⅢ上面において少量の炭化物、焼土の混じった暗褐色土の広がりとして検出した。周辺は平坦であり、重複する遺構はない。遺構内堆積土は5層からなり、焼土や炭化物を含んでいる。特に②・③からは、木炭とみられる炭化物が多く出土した。平面形は隅丸長方形を呈し、遺構の規模は長軸98cm、短軸65cmを測る。検出面からの深さは最深部でも22cmと浅く、後世に、その上部が削平されている可能性がある。底面は概ね平坦で、周壁の立ち上がりは急峻である。なお、周壁の南東隅付近は、赤褐色に熱変化していた。

本遺構は、周壁の一部が焼けていること、木炭とみられる炭化物が多く出土していることから、木炭焼成土坑と考えられる。2号平場の堆積土下より検出されていることから、蓬来内館跡断絶以前に機能したものであろう。

2号土坑 SK2 (図7, 写真14)

2号土坑は、調査区南東寄りのF4グリッドに位置する。1号平場のLⅣ上面において、暗褐色

土の広がりがとして検出した。重複する遺構はなく、1.3mほど北西に3号土坑がある。また、トレンチを掘削する際、遺構の一部を損なってしまった。遺構内堆積土は2層に分けられたが、 $\ell 1 \cdot 2$ ともL Iに近似し、かつL Vの粒子を含んでいる。また、ほぼ水平に堆積している点から人為堆積とみられる。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸長162cm、短軸長101cmを測る。底面は、中央付近が若干深くなり、検出面から最深部までの深さは62cmである。周壁の立ち上がりはほぼ垂直である。出土遺物はなく時期、性格とも不明であるが、堆積土からみて近世以降の所産ではないかと考える。

3号土坑 SK3 (図7, 写真14)

3号土坑は、調査区南東寄りのF4グリッドに位置する。1号平場のL V上面において検出され、L Vと1号堀跡の堆積土を掘り込んで造られていることを土層観察から確認した。1号堀跡を調査する際のトレンチにより削られてしまい、南北壁の大部分を失っている。遺構内堆積土は3層からなり、下端付近に三角堆積がなく、 $\ell 3$ が水平に堆積しており、 $\ell 1 \cdot 2$ もレンズ状堆積をなさないことなどから、人為堆積と判断される。

遺構の規模は東西長で91cm、西壁の遺存長で72cmを測る。平面形は隅丸長方形を呈すると推定され、検出面から最も深い部分の深さは37cmである。底面は遺存の最も良い東西方で長さ80cm、西壁の下端で65cmを測り、上端同様隅丸長方形と推定される。底面は概ね平坦で、周壁はほぼ垂直に立ち上がっている。出土遺物はなくその所属時期、性格とも不明であるが、1号堀跡の堆積土を掘り込んでいることから、館よりも新しい遺構と考えられる。

4号土坑 SK4 (図7, 写真14)

4号土坑は、調査区南東寄りのE3グリッドに位置する。2号平場西端の緩斜面において、L IIを除いた段階で検出された。重複する遺構はなく、約1m南方に1号土坑がある。遺構の北端は、伐採道を取り付ける際に損なわれた。堆積土は4層からなり、焼土や木炭とみられる炭化物を含んでいる。平面形は隅丸長方形であったと推定される。南北方向の残存長は106cm、最大幅は97cmである。周壁の残存高はもっとも残りのよい東壁で44cmあるが、斜面下位の西壁は遺存状態が悪い。底面は中央に向かって緩やかに窪む形状をなし、周壁は急角度で立ち上がっている。

本遺構は、周壁に熱変化がみられなかったものの、木炭とみられる炭化物が少量ながら出土していることから、隣接する1号土坑同様、木炭焼成土坑の可能性がある。L II直下より検出されていることから、蓬米内館跡造営以前の所産であろう。

ピット (図8)

調査区南東端の1号平場からは、ピットが5基検出されている。これらのピットは、1号平場の表土を除去した段階で、F4-P1及びG4-P1~3はL V上面において、F4-P2は1号堀跡の堆積土上面において検出された。G4-P2は調査区境で検出され、表土直下から掘り込まれ

ていることを確認した。

ピットの平面形は、いずれも楕円形または隅丸方形である。開口部の計測値と検出面からの深さを、表2に示した。F4-P1及びG4-P1～3は、1.5～3mの距離をもってある程度近接した位置関係にある。しかし、調査区内を見る限りにおいては、建物跡や柵となり得るような規則的な配列を確認することはできなかった。ピット内の堆積土はいずれも1層のみで、柱痕は認められなかった。堆積土の色調はL Iに近似し、全般に締まりはない。また周壁からの崩落土を多く含んでいる。

これらのピットは柱痕が確認されず、周壁からの崩落土もみられる。このため柱穴の可能性は低く、その性格は不明と言わざるを得ない。堆積土がL Iに近い色調のため、比較的新しい時期のものであろう。G4-P2が、表土直下から掘り込まれていることを考え合わせると、近世以降から近代にかけての所産と考えている。(宮田)

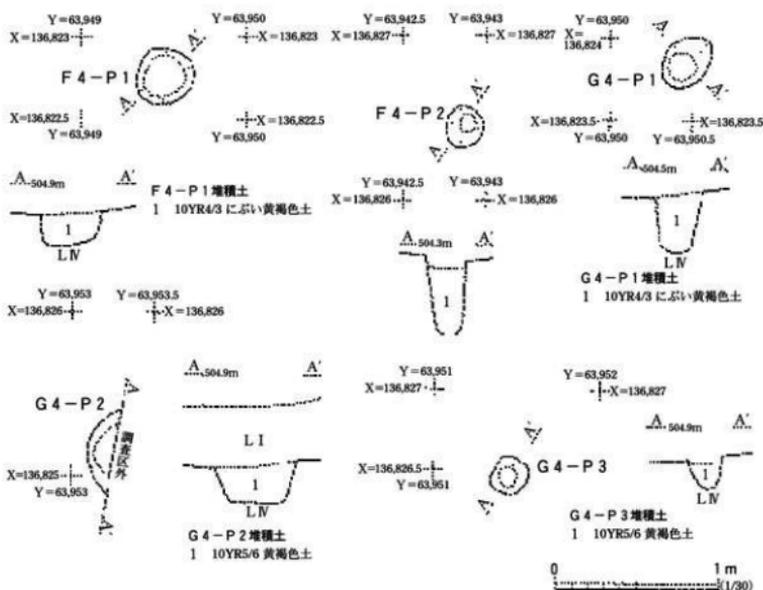


図8 グリッドピット

表2 ピット一覧

グリッド	ピットNo.	長径	短径	深さ	グリッド	ピットNo.	長径	短径	深さ
G4	P1	36	28	35	F4	P1	35	34	18
G4	P2	50	-	24	F4	P2	25	22	40
G4	P3	24	20	15					

※計測値の単位はcm

第3章 ま と め

今回の調査で検出された館の遺構は、堀と土塁を伴う1号平場とそれを帯郭状に取り囲む2号平場である。その他に、土坑4基とピット5基が確認されている。蓬来内館跡廃絶以前のものとした1号土坑から出土した木炭の放射性炭素年代を測定したところ、15～16世紀代との結果を得た。当地域は鉄滓の散布地が多いことが知られているが、蓬来内館跡造成以前あるいは機能時に、製鉄や鍛冶に関連する炭焼きが行われていた可能性がある。

今回の調査では遺物が出土しなかったため、蓬来内館跡の築城から廃城に至る年代を明らかにすることは難しい。ここでは蓬来内館跡の状況と、周辺に現存する館跡やそれに関する資料から、蓬来内館跡の性格と年代を推定したい。今回の調査で空堀と土塁を伴う平場が検出されたことから、蓬来内館跡が中世城館としての体裁を備えていたと言えよう。ただし、平場に伴う建物跡は確認できなかった。建物跡は調査区外に遺存している可能性があるが、今回の調査成果を見る限り居館とは考えにくい。館跡の向きであるが、土塁や堀の築かれた方向から蓬来内館跡は、北から東にかけた方向、現在の県道矢吹・小野線方向を意識して築かれているように思える。この方向には水田を挟んで武名坂館跡がある。また県道矢吹・小野線の旧道は、蓬来内館跡と武名坂館跡の間を通っていたとされている（平田村史談会1997）。現在の県道矢吹・小野線は、平田村と玉川村を結ぶ主要道路であるが、中世においても上蓬田の蓬田館跡と玉川村南須釜に所在する大寺城を結ぶ街道があったと推察される。蓬来内館跡は、この交通路を押さえる役割の一端を担っていたと考えられることもできよう。ただし、遺物が出土していないことから兵が常駐していたのではなく、有事にのみ機能するような館であったのではないか。

蓬来内館跡は、蓬田館跡と無関係には成り立得ないであろう。蓬田館跡は、蓬来内館跡の北東約2kmに位置し、現在の国道49号線に面している。石川氏の所領の北辺を守備する拠点として、築かれたと考えられている。この館には、文明3年（1471年）から天正17年（1589年）まで石川氏の庶子の系譜である蓬田氏が在城したとされる。歴代の城主は、蓬田館の改修や向館など周辺の館の整備に努めている。こうした動きの中で蓬来内館跡も築かれ、蓬田館跡の支城の一つとして機能していたものではなからうか。

（今野）

引用・参考文献

- | | | |
|----------|------|----------------|
| 平田村 | 1999 | 『平田村史 第一巻 通史編』 |
| 平田村史談会 | 1997 | 『小平城と蓬田城』 |
| 福島県教育委員会 | 1998 | 『福島県の中世城館』 |
| 玉川村 | 1980 | 『玉川村史』玉川村 |

付 編

付編 福島県石川郡玉川村畑中遺跡、平田村蓬来内館跡

出土炭化物の放射性炭素年代測定結果

株式会社加速器分析研究所

福島県石川郡玉川村畑中遺跡で確認された土坑及び性格不明遺構から出土した炭化物と、平田村蓬来内館跡で確認された土坑から出土した炭化物について株式会社加速器分析研究所に依頼し、放射性炭素年代測定（AMS法）を実施し、表1の結果が報告された。分析試料は、畑中遺跡の1号土坑で3点（試料番号1・2・3）、1号性格不明遺構で3点（試料番号4・5・6）、そして蓬来内館跡の1号土坑で3点（試料番号7・8・9）の合計9点である。なお、分析試料の来歴等については、出土場所、出土場所の緯度経度、試料の大きさと重さ以外は分析の客観性を担保するために加速器分析研究所には知らせていない。

分析の結果、畑中遺跡の1号土坑は8世紀、1号性格不明遺構は17世紀、蓬来内館跡の1号土坑は15～16世紀頃のものとの結果を得た。（以上編者）

1. 年代測定値の算出方法

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用している。
- 2) BP年代値は、1950年からさかのぼること何年前かを表している。
- 3) 付記した誤差は、標準偏差（ 1σ ）に相当する年代で、次のように算出している。複数回（通常は4回）の測定値について χ^2 検定を行い、測定値のばらつきが小さい場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、ばらつきが大きい場合には不偏分散の平方根（標準偏差）と統計誤差から求めた値を比較して大きい方を誤差としている。
- 4) $\delta^{13}\text{C}$ の値は、通常は質量分析計を用いて測定するが、AMS測定の場合に同時に測定される $\delta^{13}\text{C}$ の値を用いることもある。

$\delta^{13}\text{C}$ 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載した。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰；パーミル）で表した。

$$\delta^{13}\text{C} = [(^{13}\text{A}_s - ^{13}\text{A}_s) / ^{13}\text{A}_s] \times 1000 \quad (1)$$

$$\delta^{13}\text{C} = [(^{13}\text{A}_s - ^{13}\text{A}_{\text{std}}) / ^{13}\text{A}_{\text{std}}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、

$^{13}\text{A}_s$ ：試料炭素の ^{13}C 濃度；($^{13}\text{C}/\text{C}$)_sまたは ($^{13}\text{C}/\text{C}$)_s。

$^{13}\text{A}_s$ ：標準現代炭素の ^{13}C 濃度；($^{13}\text{C}/\text{C}$)_sまたは ($^{13}\text{C}/\text{C}$)_s。

$\delta^{13}\text{C}$ は、質量分析計を用いて試料炭素の ^{13}C 濃度（ $^{13}\text{A}_s = ^{13}\text{C}/\text{C}$ ）を測定し、PDB（白亜紀のペレムナイト（矢石）類の化石）の値を基準として、それからのずれを計算する。

但し、IAAでは加速器により測定中に同時に $^{13}\text{C}/\text{C}$ も測定しているため、標準試料の測定値との比較から算出した $\delta^{13}\text{C}$ を用いることもある。この場合には表中に〔加速器〕と注記した。

また、 $\Delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素が $\delta^{13}\text{C} = -25.0$ （‰）であるとしたときの ^{13}C 濃度（ $^{13}\text{A}_s$ ）に換算した上で計算した値である。（1）式の ^{13}C 濃度を、 $\delta^{13}\text{C}$ の測定値をもとに次式のように換算する。

$$^{13}\text{A}_s = ^{13}\text{A}_s \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C}/1000))^2 \quad (^{13}\text{A}_s \text{として} ^{13}\text{C}/\text{C} \text{を使用するとき})$$

または

$$= {}^{13}\text{A}_s \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C}/1000)) \quad ({}^{13}\text{ASとして}{}^{13}\text{C}/{}^{12}\text{Cを使用するとき})$$

$$\Delta^{13}\text{C} = [({}^{13}\text{A}_s - {}^{13}\text{A}_s) / {}^{13}\text{A}_s] \times 1000 \text{ (‰)}$$

${}^{13}\text{C}$ 濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC (percent Modern Carbon) がよく使われており、 $\Delta^{13}\text{C}$ との関係は次のようになる。

$$\Delta^{13}\text{C} = (\text{pMC}/100 - 1) \times 1000 \text{ (‰)}$$

$$\text{pMC} = \Delta^{13}\text{C}/10 + 100 \text{ (‰)}$$

国際的な取り決めにより、この $\Delta^{13}\text{C}$ あるいはpMCにより、放射性炭素年代 (Conventional Radiocarbon Age; yrBP) が次のように計算される。

$$T = -8033 \times \ln [(\Delta^{13}\text{C}/1000) + 1]$$

$$= -8033 \times \ln (\text{pMC}/100)$$

2. 試料に伴う分析工程

【処理法】

- 1) メス、ピンセットを用いて適量を採取した。この際、付着していた土をできるだけ除去した。炭化物については、内部より採取した。
- 2) 1Nの塩酸を用いて、80℃で数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈した。
- 3) 0.001~1Nの水酸化ナトリウム水溶液を用いて数時間処理した。その後、超純水で中性になるまで希釈した。
- 4) 1Nの塩酸を用いて、80℃で数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈した。なお、酸・アルカリ処理後の希釈の際には遠心分離法を用いた。
- 5) 試料を80℃で乾燥させた。
- 6) 試料を1gの酸化銅と共に、外径9mm、長さ30cmの石英管に入れ、真空下で封じ切った。
- 7) 6を500℃30分、850℃2時間で加熱し、試料中の炭素を二酸化炭素にした。
- 8) 真空ライン中で冷媒を用いて、二酸化炭素を精製した。
- 9) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイトにした。
- 10) 得られたグラファイトを、内径1mmのアルミニウム製の容器にハンドプレス機で詰め、ターゲットとした。

【測定】

測定機器は、134試料装填可能なイオン源が設置された、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置 (NEC Pelletron 9SDH-2) を使用する。

AMS測定時には、標準試料である米国国立標準局 (NIST) から提供されるシュウ酸 (HOX-II) とバッググラウンド試料の測定も行なう。また、測定では加速器により測定中同時に ${}^{13}\text{C}/{}^{12}\text{C}$ の測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}\text{C}$ を算出する。

【放射性炭素年代算出法】

- 1) 加速器を用いて微量炭素の同位体比分析を行なう。
- 2) 定量は14C測定の標準試料である米国国立標準局 (NIST) から提供されるシュウ酸 (HOxII) を用いている。
- 3) 放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。測定年代は1950年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は、複数回の測定値について χ^2 検定を行い、測定値のばらつきが小さい場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、ばらつきが大きい場合には統計誤差を用いている。
- 4) 暦年較正はOxCal Ver3.10を用いている。

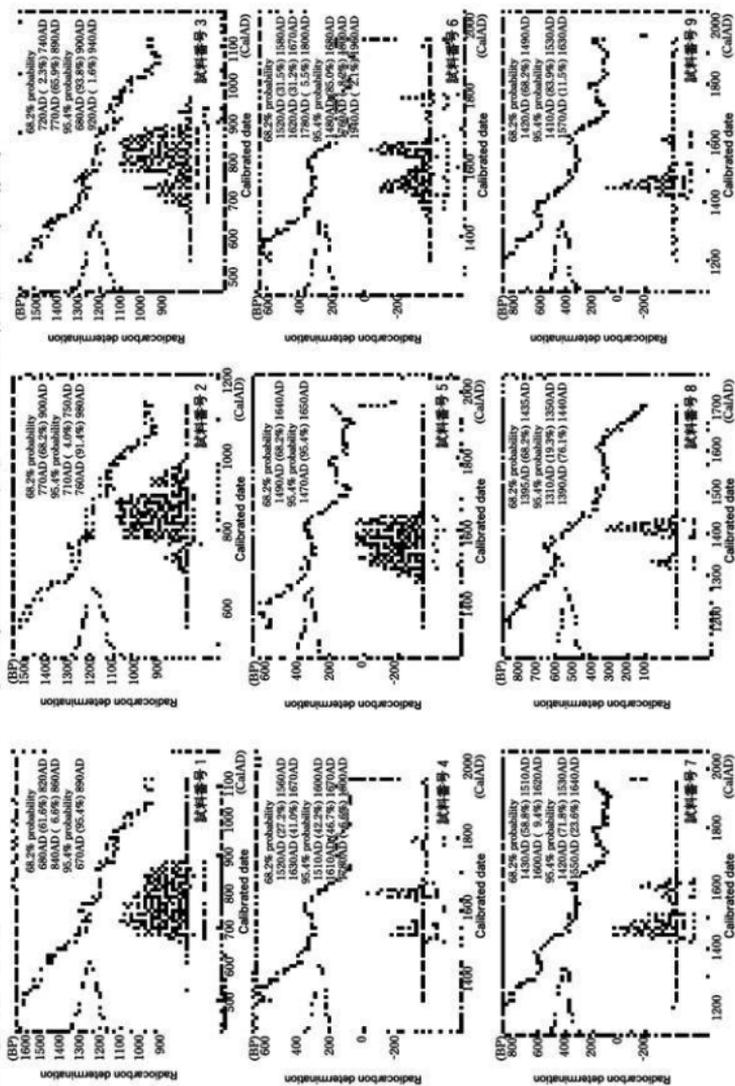
表1 畑中遺跡・蓬来内館跡出土炭化物の放射性炭素年代測定結果

試料の出土場所・質・番号		BP年代および炭素の同位体比			
出土場所: 畑中遺跡	1号土坑-Ⅱ3	Libby Age (yr BP)	: 1,240 ± 40		
試料の質: 炭化物		$\delta^{13}\text{C}$ (‰), (加速器)	= -24.90 ± 0.87		
試料番号: 1		$\Delta^{13}\text{C}$ (‰)	= -142.5 ± 3.9		
		ρMC (‰)	= 85.74 ± 0.39		
(参考)	$\delta^{13}\text{C}$ の補正なし	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	= -142.4 ± 3.6		
		ρMC (‰)	= 85.76 ± 0.36		
		Age (yr BP)	: 1,230 ± 30		
出土場所: 畑中遺跡	1号土坑-Ⅱ3	Libby Age (yr BP)	: 1,180 ± 40		
試料の質: 炭化物		$\delta^{13}\text{C}$ (‰), (加速器)	= -27.50 ± 1.01		
試料番号: 2		$\Delta^{13}\text{C}$ (‰)	= -136.5 ± 4.3		
		ρMC (‰)	= 86.35 ± 0.43		
(参考)	$\delta^{13}\text{C}$ の補正なし	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	= -140.9 ± 3.9		
		ρMC (‰)	= 85.91 ± 0.39		
		Age (yr BP)	: 1,220 ± 40		
出土場所: 畑中遺跡	1号土坑-Ⅱ底面	Libby Age (yr BP)	: 1,210 ± 40		
試料の質: 炭化物		$\delta^{13}\text{C}$ (‰), (加速器)	= -23.65 ± 0.89		
試料番号: 3		$\Delta^{13}\text{C}$ (‰)	= -139.7 ± 4.2		
		ρMC (‰)	= 86.03 ± 0.42		
(参考)	$\delta^{13}\text{C}$ の補正なし	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	= -137.3 ± 3.9		
		ρMC (‰)	= 86.27 ± 0.39		
		Age (yr BP)	: 1,190 ± 40		
出土場所: 畑中遺跡	1号性格不明遺構-Ⅱ底面	Libby Age (yr BP)	: 270 ± 30		
試料の質: 炭化物		$\delta^{13}\text{C}$ (‰), (加速器)	= -24.99 ± 0.92		
試料番号: 4		$\Delta^{13}\text{C}$ (‰)	= -33.6 ± 4.1		
		ρMC (‰)	= 96.64 ± 0.41		
(参考)	$\delta^{13}\text{C}$ の補正なし	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	= -33.5 ± 3.6		
		ρMC (‰)	= 96.65 ± 0.36		
		Age (yr BP)	: 270 ± 30		
出土場所: 畑中遺跡	1号性格不明遺構-Ⅱ底面	Libby Age (yr BP)	: 330 ± 30		
試料の質: 炭化物		$\delta^{13}\text{C}$ (‰), (加速器)	= -24.28 ± 0.75		
試料番号: 5		$\Delta^{13}\text{C}$ (‰)	= -40.7 ± 4.0		
		ρMC (‰)	= 95.93 ± 0.40		
(参考)	$\delta^{13}\text{C}$ の補正なし	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	= -39.3 ± 3.8		
		ρMC (‰)	= 96.07 ± 0.38		
		Age (yr BP)	: 320 ± 30		
出土場所: 畑中遺跡	1号性格不明遺構-Ⅱ底面	Libby Age (yr BP)	: 270 ± 40		
試料の質: 炭化物		$\delta^{13}\text{C}$ (‰), (加速器)	= -25.03 ± 0.84		
試料番号: 6		$\Delta^{13}\text{C}$ (‰)	= -32.8 ± 4.5		
		ρMC (‰)	= 96.72 ± 0.45		
(参考)	$\delta^{13}\text{C}$ の補正なし	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	= -32.9 ± 4.2		
		ρMC (‰)	= 96.71 ± 0.42		
		Age (yr BP)	: 270 ± 40		
出土場所: 蓬来内館跡	1号土坑-Ⅱ2	Libby Age (yr BP)	: 410 ± 40		
試料の質: 炭化物		$\delta^{13}\text{C}$ (‰), (加速器)	= -23.02 ± 0.85		
試料番号: 7		$\Delta^{13}\text{C}$ (‰)	= -49.4 ± 4.2		
		ρMC (‰)	= 95.06 ± 0.42		
(参考)	$\delta^{13}\text{C}$ の補正なし	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	= -45.5 ± 3.8		
		ρMC (‰)	= 95.45 ± 0.38		
		Age (yr BP)	: 370 ± 30		
出土場所: 蓬来内館跡	1号土坑-Ⅱ2	Libby Age (yr BP)	: 530 ± 30		
試料の質: 炭化物		$\delta^{13}\text{C}$ (‰), (加速器)	= -22.66 ± 0.80		
試料番号: 8		$\Delta^{13}\text{C}$ (‰)	= -63.6 ± 3.8		
		ρMC (‰)	= 93.64 ± 0.38		
(参考)	$\delta^{13}\text{C}$ の補正なし	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	= -59.1 ± 3.5		
		ρMC (‰)	= 94.09 ± 0.35		
		Age (yr BP)	: 490 ± 30		
出土場所: 蓬来内館跡	1号土坑-Ⅱ2	Libby Age (yr BP)	: 430 ± 40		
試料の質: 炭化物		$\delta^{13}\text{C}$ (‰), (加速器)	= -23.08 ± 0.99		
試料番号: 9		$\Delta^{13}\text{C}$ (‰)	= -52.1 ± 4.5		
		ρMC (‰)	= 94.79 ± 0.45		
(参考)	$\delta^{13}\text{C}$ の補正なし	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	= -48.4 ± 4.0		
		ρMC (‰)	= 95.16 ± 0.40		
		Age (yr BP)	: 400 ± 30		

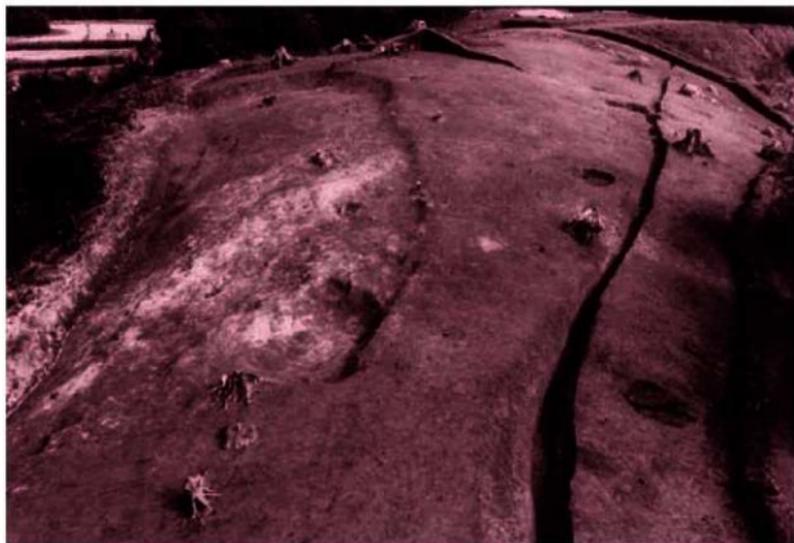
株式会社加速器分析研究所

表2 【参考値：暦年補正 Radiocarbon determination】

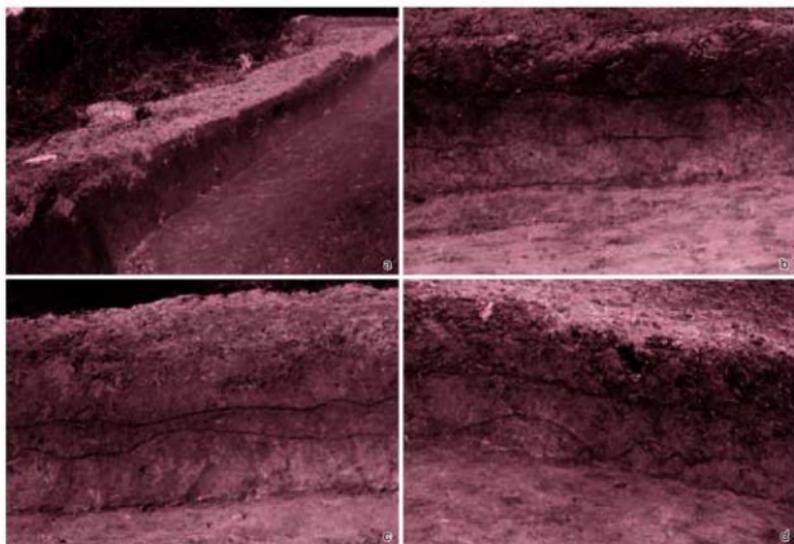
Atmospheric data from Reimer et al(2004)JONCal v3.10 Borek Ramsey(2005)zomb5 ad12 prob usg(chron)



写 真



1 遺跡全景 (南西から)



2 基本土層

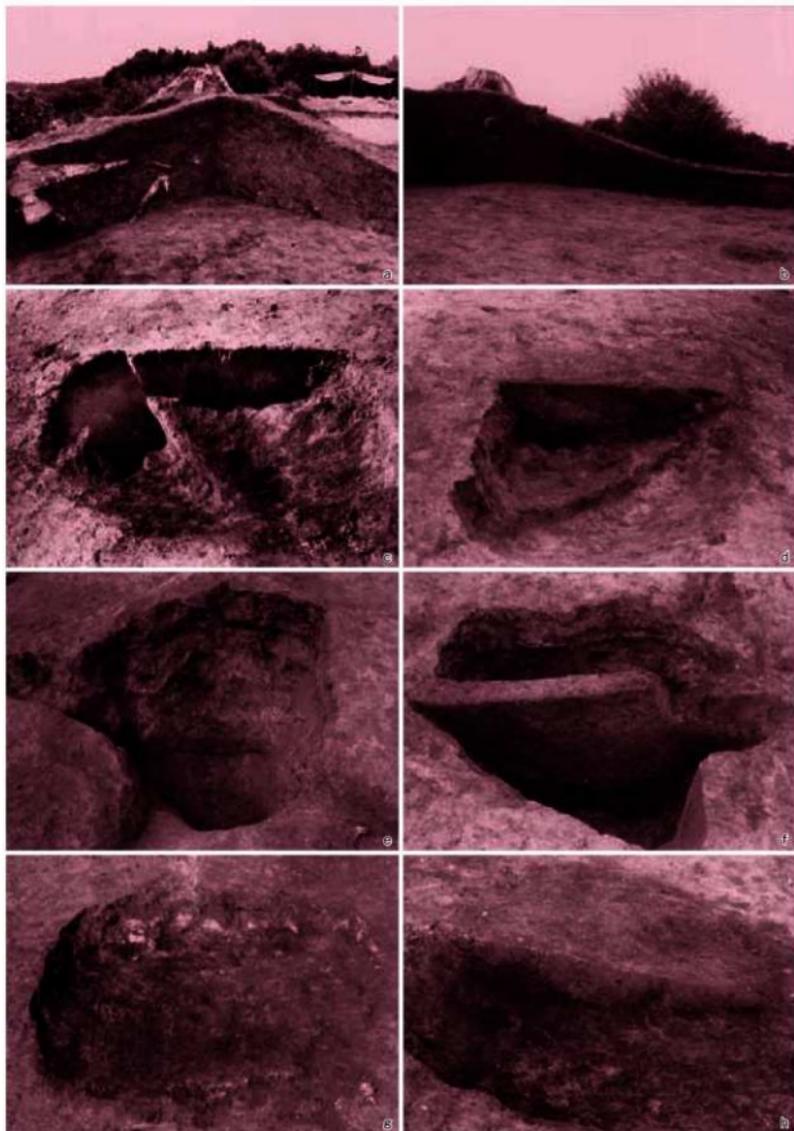
a 土層A-A' (南から) b 土層A-A' (南東から)
c 土層B-B' (南西から) d 土層C-C' (東から)



3 1号塚全景（南東から）



4 1号塚土層（南東から）



5 塚・土坑・性格不明遺構

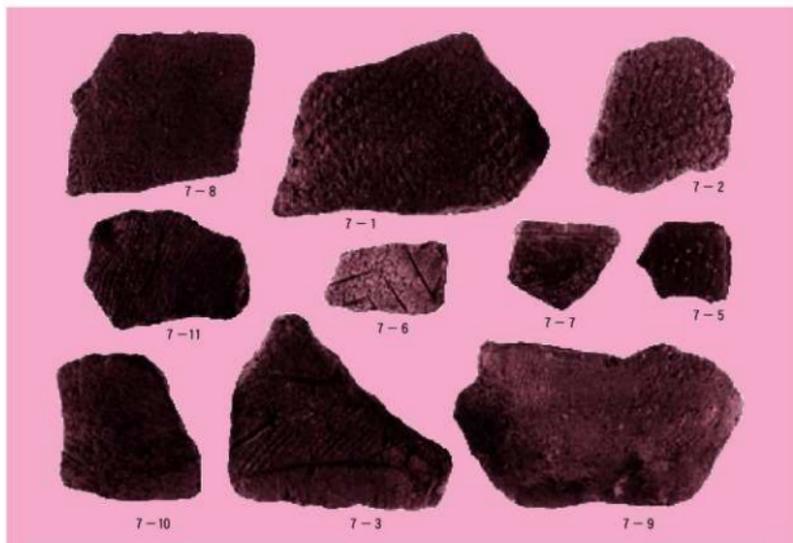
- | | | | | | |
|---|-----------------|---|-------------------|---|--------------|
| a | 1号塚土層1 (南から) | b | 1号塚土層2 (南東から) | c | 1号土坑 (東から) |
| d | 1号土坑土層 (南西から) | e | 2号土坑 (東から) | f | 2号土坑土層 (南から) |
| g | 1号性格不明遺構 (南東から) | h | 1号性格不明遺構土層 (南西から) | | |



6 1・2号溝跡



a 1号溝跡 (南西から) b 2号溝跡 (南西から)



7 1号塚・遺構外出土遺物



1 遺跡現況（西から）



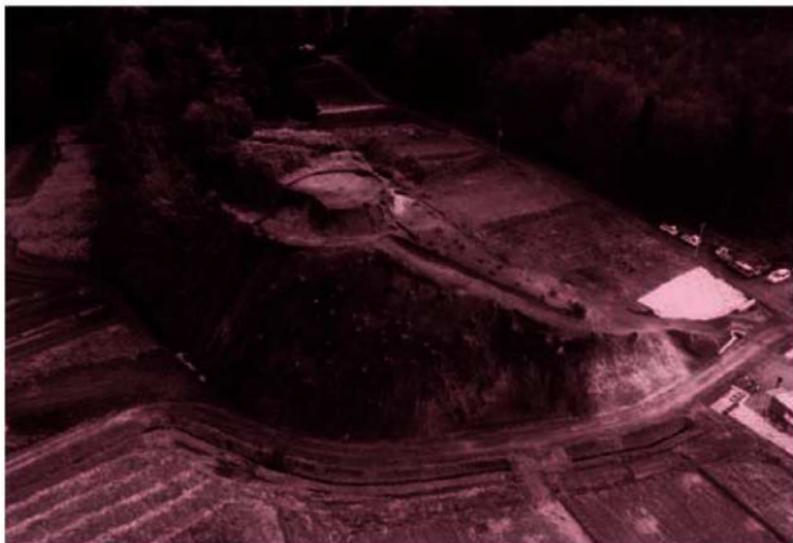
2 遺跡現況（北から）



3 遺跡全景（西から）



4 遺跡全景（北東から）



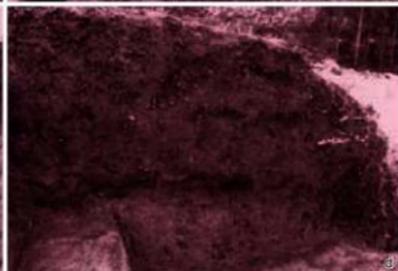
5 遺跡全景（北から）



6 1・2号平場全景（北西から）



7 1号平場（北西から）

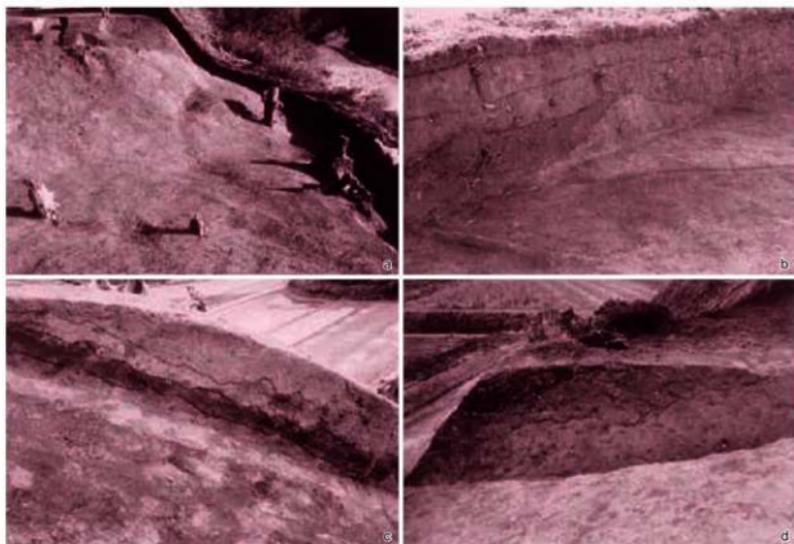


8 1号平場細部

a 1号平場（西から）
 c 北斜面土層（西から）
 b 1号平場（西から）
 d 西斜面土層（北から）



9 2号平場(北東から)



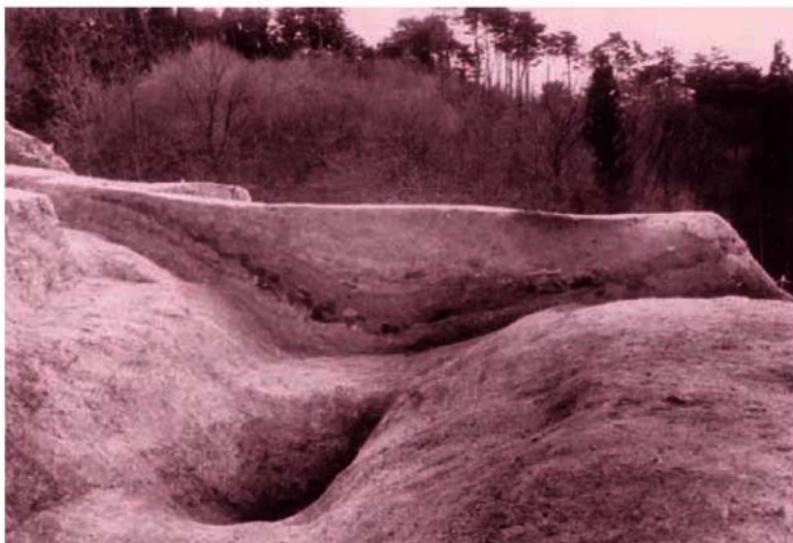
10 2号平場細部

a 2号平場(西から)
c 土層(東から)

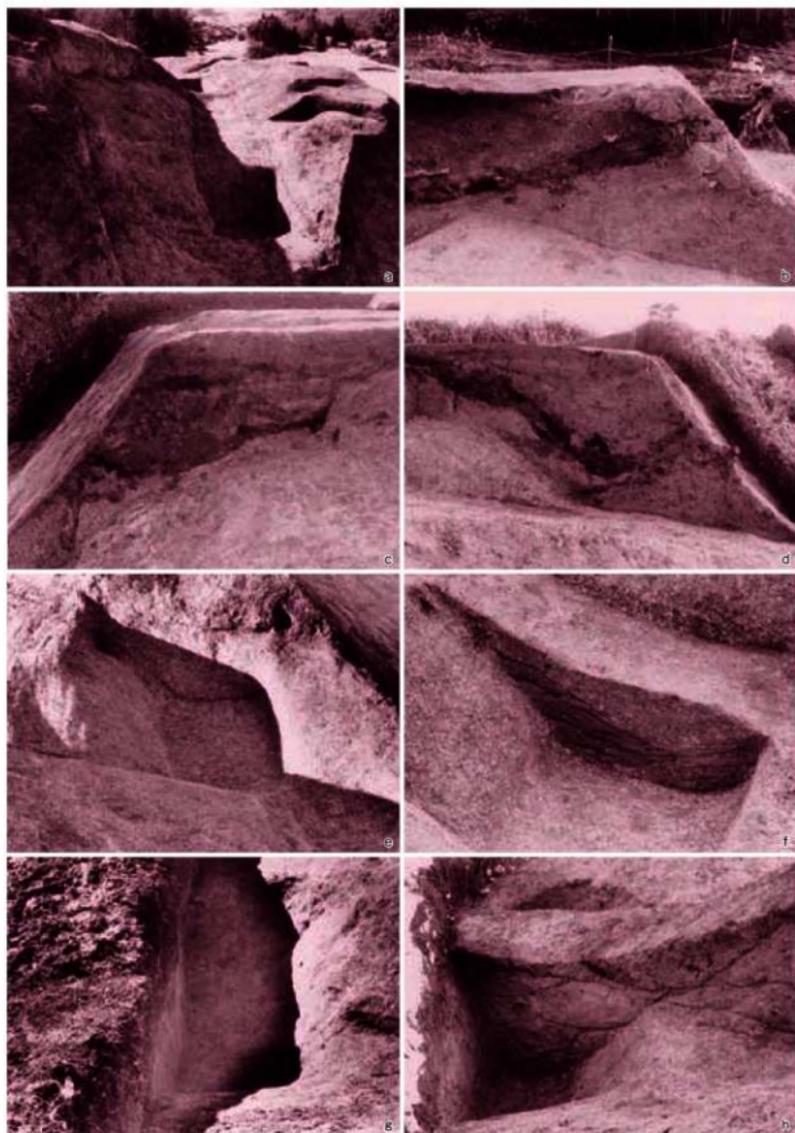
b 土層(南西から)
d 西斜面土層(南から)



11 1号畑跡全景（南西から）

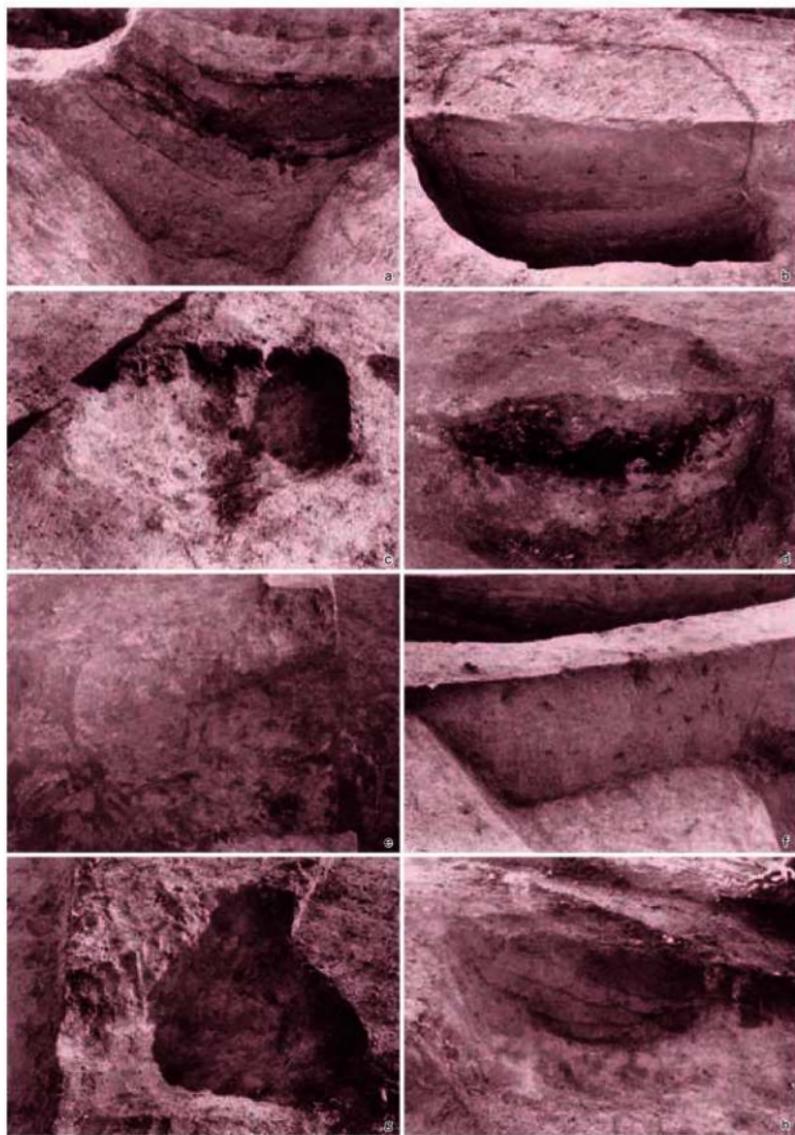


12 1号畑跡・1号土塁土層（北から）



13 1号船跡細部

- a 全景(北東から) b 東西土層(北から) c 南北土層(西から)
 d 南北土層(西から) e P.1 (北東から) f P.1土層(北東から)
 g P.3(東から) h P.3土層(東から)



14 1号畑跡・土坑

a 1号畑跡P-2土層(北から)

b 2号土坑土層(北から)

c 1号土坑全景(西から)

d 1号土坑土層(南から)

e 3号土坑全景(西から)

f 3号土坑土層(北から)

g 4号土坑全景(西から)

h 4号土坑土層(北から)

報告書抄録

ふりがな	ふくしまくろう・あぶくまみなみどろろ いせきはっつちょうさほうこく 18							
書名	福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告18							
シリーズ名	福島県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第436集							
編著者名	宮田安志 今野 徹							
編集機関	財団法人福島県文化振興事業団							
所在地	〒960-8116 福島県福島市春日町5-54							
発行年月日	西暦2006年9月15日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
煙中遺跡	福島県石川郡玉川村 大字吉字煙中	07502	00221	37° 12' 15" ? ? 37° 12' 17"	140° 26' 29" ? ? 140° 26' 31"	20050913 ? 20051021	1,000㎡	道路（福島空港・あぶくま南道路）建設に伴う事前調査。
蓬米内館跡	福島県石川郡平田村 大字下蓬田字蓬米内 ・行人塚	07503	00122	37° 13' 47" ? ? 37° 13' 49"	140° 33' 13" ? ? 140° 33' 15"	20051019 ? 20051209	1,500㎡	同上
所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
煙中遺跡	塚・散布地	近世	塚 (1) 土坑 (2) 溝跡 (3) 性格不明遺構 (1)	縄文土器・弥生土器		近世の塚の他に、木炭焼成土坑や近世以降とみられる溝跡が確認された。		
蓬米内館跡	城館跡	中世	平場 (2) 堀跡 (1) 土塁 (1) 土坑 (4)	なし		中世の小規模な城館跡と考えられる。		

福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告18

畑中遺跡
蓬莱内館跡

平成18年9月15日発行

編集	財団法人福島県文化振興事業団		
発行	福島県教育委員会	〒960-8688	福島市杉妻町2-16
	財団法人福島県文化振興事業団	〒960-8116	福島市春日町5-54
	福島県土木部	〒960-8670	福島市杉妻町2-16
印刷	トキワ印刷株式会社	〒962-0001	須賀川市森宿字ヒジリ田50
